

2008年度鳴門市人権地域フォーラム

テーマ 「ひとつと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

■と き 2008年8月27日(金)13:30～16:30

■ところ 鳴門地域地場産業振興センター

コーディネーター A(北島中学校教諭)

パネリスト B(鳥取県琴浦町人権教育推進員)

C(鳥取県倉吉市たんぼぼの会代表)

D(止揚の会事務局)

《司会》

ただいまより、2008年度鳴門市人権地域フォーラムを開会いたします。開会に先立ちまして、鳴門市人権教育推進協議会会長の中川がごあいさつを申し上げます。

《鳴門市人権教育推進協議会会長》

本日は、大変ご多用の中、お足元の悪い中にも関わりませず、県内外から多数の皆さん方のご参加をいただきまして、2008年度鳴門市人権地域フォーラムが、このように会場いっぱいの方をお迎えして、盛大に開催できますことを心から感謝を申し上げます。大変ありがとうございます。皆さん方におかれましては、日頃それぞれの地域や職場におきまして、同和問題をはじめ、さまざまな人権問題解決のための取り組みをいただいておりますことに、心から敬意と感謝を申し上げる次第でございます。

さて、本市におきましても、これまで皆様のご協力をいただきながら、人権問題の解決に向けて、多くの施策を続けてまいりました。しかし、ご承知のようにいまだ完全な解放には至っておりません。

同和問題をはじめとする深刻な人権問題が、存在いたしておるのが現実でございます。世の中が進歩する反面、人権に関わる環境も複雑化するようになりまして、身近な生活の中にも、これはおかしいと思うような場面に出会うことが度々ございます。

新聞や、テレビのニュースの中にも、命の尊さを軽視をした事件や出来事などが、頻繁に報道されているのが今日の社会でありまして、決して良い環境とはいえない状況でございます。

更には、情報の国際化というような難しいことばの裏には、インターネットによる人権侵害など、新たな問題や課題も生まれまして、人権問題が一層複雑化、多様化しているように思います。

そういった状況の中で、今年も人権地域フォーラムを開催させていただきました。今年も、自分自身をみつめたり、広い視野に立って人権を考える時間にしていただけるものと期待をいたしているところでございます。

「ひとつとからわがことへ」をテーマにいたしまして、語りを通して、人権教育の可能性やよろこびを追求し、お互いの人権感覚、人権意識を高め合い、人と人との温かいつながりが感じることでできる、実りの多い研修としていただきたいと願っているところでございます。

パネリストの皆さん、お忙しいところを本当にありがとうございました。よろしく願いをいたします。そして、今年もこの人権地域フォーラムが、松茂町、北島町、藍住町、板野町、上板町の各教育委員会ならびに、人権教育推進協議会の皆さん方の積極的なご協力をいただき、開催をできますことに、改めてお礼を申し上げ、開会にあたりましてのごあいさつとさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

《司会》

それでは、早速ですが、本日の人権地域フォーラムにお招きした講師の方々をご紹介します。恐れ入りますが、お名前をお呼びした講師の皆様は、随時壇上の方へご移動をお願いいたします。

はじめに、本日のコーディネーターを担当して下さいます、北島中学校教諭 Aさんです。(拍手に迎えられゆっくり壇上へ上がる)続きまして、パネリストとしてご教授して下さいます方々を、ご紹介させていただきます。

(一人一人のパネリストが、紹介された後拍手の中を壇上に上がり、席につく)

鳥取県琴浦町人権教育推進委員のBさんです。続きまして、鳥取県倉吉市たんぼぼの会代表のCさんです。最後、吉野川市止揚の会事務局のDさんです。(Dさんの着席を待って)本日は、以上4名の講師の皆様方に『ひとごと』から『わがこと』へ ～自己をみつめ 人と人がつながる人権学習～というテーマでフォーラムを進めさせていただきます。

フォーラム開始の前に、ひとつ会場の皆様方へお願いをさせていただきます。本日のフォーラムは、前半、パネリストの方々から「ひとごとからわがこと」へ」というテーマで思いを語っていただきます。後半、会場の皆様方とのディスカッションという形にしております。それで、本日はフロアの方にテレビカメラが設置をされています。これは、本日の前半の部分を、それぞれの皆様の許可を得て撮影させていただいて、人権啓発番組として放映させていただくためのものです。後半の会場とのディスカッションについては撮影いたしませんので、その旨、ご了解をいただけたらと思います。よろしく申し上げます。それでは、A先生進行につきましてよろしく申し上げます。

《コーディネーター A》

皆さんこんにちは。(会場より「こんにちは」)これくらいの音で、後ろの方は大丈夫でしょうか。(後ろからOKのサインが返る)この会場は、マイクで毎年苦勞します。

思いが広がって行って、人権問題を一人一人が「わがこと」として語り、人間として解放されていくよるこびをつかんでいく、そんなこれからの時間になればと思います。今回もたくさんの中学生、高校生が参加してくれています。

昨年度、人権学習を通して生き生きと育っていった青年達がパネラーとして思いを語ってくれました。そのフォーラムがきっかけで、今年度もたくさんの中・高校生が参加をしてくれています。

私は、北島中学校で3年目になります。共に人権学習に取り組んだ、北島中学校の子ども達の営みを、昨年度のこの人権地域フォーラムの記録と共に、『生きる絆』という冊子にしました。(実際に冊子を持ち上げ紹介しながら)この中に、昨年度のこの会での語り合いの記録が入っています。この営みを誇りとして学ぶ子ども達が、北島中学校を育っていきます。このフォーラムに昨年度参加してくれた生徒の綴ってくれた言葉が、いつも私の心を打ちます。冒頭、その文章を紹介していきます。

私は、部落差別についてよく知りません。だから、部落出身だとか、そういうのを考えずに生活すればいいだけだと思っていました。私の『モノサシ』で見ると、どこ出身だとかは関係なく、いろんな人ときき合えるので、この考えていいんだと思っていました。

でも、これが、パネラーの皆さんが話してくれた『無知』だということに気がつきました。『無知』だからこそ、『悪意』がない。『悪意』がないからこそ、人の気持ちがわからない。こんなに怖いことはないと思います。

私がパネラーの皆さんの語りを通して、『無知とは怖いことだ』と認識することができたのは、先生、友達、親、自分の周りの人たちのおかげだと思います。そういうことを知り、身のまわりの人権に気をつけるようになれて、少しずつ

だけど、部落差別やいろいろな差別についてわかり始めました。人権学習は、相手のことを知り、自分のことを知ってもらうことから始まっていくと思います。

私たちはこれまで、心から信じられる友達づくりをめざして、人権学習をがんばってきました。友達と語り、クラスで語り、学年全体で語り合うよこびが一人ひとりの中に広がってきたと思います。卒業という人生の大きな峠に向けて、私たちは歩き続けます。そして、厳しい部落差別の現実を生き生きと乗り越え、最高の笑顔で語り合ってくれたパネラーの皆さんのような生涯の絆をみんなで作っていきます、

部落差別の現実を乗り越え、生き生きと最高の笑顔で語ってくれたパネリストの皆さんのとの出会いを私は誇りとし、あの皆さんのように生涯の絆を私も作りたいと綴ってくれたように、昨年度のフォーラムは、北島中学校の子ども達に大きな感動を呼び起こし、板野の人権教育研究大会の感動の公開授業へとつながって行きました。

なかなか、同和問題が「わがこと」になりません。「あの人たちの問題」、「自分とは関わらないこと」、「ひとごと」であります。でも、現実を知ること、私たちが人間として生き生きと生きる、そんな力をつかんでいくことができる。

今日後半、多くの皆さんの「わがこと」が、自分の精いっぱい思いが語り合えて、会場がひとつになる。そんな時間になればと思います。

前半、3人のパネリストの皆さんから思いを語っていただきます。(今年度のチラシを取り出し、会場に向けて掲げながら)非常に立派なチラシを作ってくださいました。このチラシの後ろ側に、3人のメッセージがあります。このメッセージの中に、綴られているそれぞれの思いに感動があります。このメッセージを見ていただいて、この会場へおいでの方もあろうかと思えます。

最初に、鳥取県の琴浦町で地区の子ども達と必死に関わり、必死にその命を支えていく日常の営みを誠実に頑張っておいで、Bさんからその思いを語っていただきます。Bさんは、私達にこんなメッセージを届けてくれました。

幼女時代、苦勞した母に育てられました。夕日に手を合わせて、自分の生き様を語る母の姿を見ながら、当時10歳の私は、養女としておばと暮らすことを嫌と言えませんでした。(メッセージの紹介中、何度も涙を拭くBさんの姿がある)母から、すべてのことに感謝をし、生きる喜びを忘れるなど聞かされました。私は、被差別部落に生まれたことによって、人との温かいつながりが生まれ、生きる意味を考えるようになりました。

では、部落差別の中をひたむきに生きておいで、その思いに出会っていただいて、この問題を「わがこと」として考えていただく時間になりたいと思います。それではBさん、よろしくお祈いします。(拍手)

《パネリスト B》

子どもの頃

(気持ちを切り替えるように、笑顔でゆっくりと語りかけるように)皆さん、こんにちは。(会場より「こんにちは」)去年も来させていただきました。今年も、こうしてパネラーとして来させていただくことができました。今、母のことを話していただきました。もう、それだけで涙が出ます。

とても苦勞した母でした。私は、どんなに苦しい生活でも、「母の子でよかった」という思いで毎日生きてきました。私は、小学校の時から、おばの家に子どもがいなかったため、養女として暮らすことになりました。

私は、初め、「嫌だ。お母さん、行きたくない」と言いたかったです。でも、母が「頼むけなあ」「頼むけ

なあ」と言ったので、「ああ、行かないけん」と思って、母と別れ、おばの家で暮らすことになりました。

私は、今日、「誰の子に」「どこの地に」ということについてお話させていただきます。まず、誰の子に生まれるか、私たち、子どもは親を選べません。そして、「あっちの家の方がお金持ちだし、あっちの家の方がいいなあ」とか、「あっちの家の方がこっちの家よりいいなあ」と子どもの頃には思ったりしました。

なぜなら、私の父親は、私が小さい時から病気ばかりで、いろんな病院を転々と変わって、入院ばかりを続けていましたので、母がたった1人で子どもを育て、梨畑も全部自分でして、田んぼも作って、一生懸命働いて私たちを育ててくれました。

私は、「誰の子に」「どこに地に」ということを考えた時に、私たちは、被差別部落と言われるところに住んでいます。そして、人の中には、被差別部落を差別する人がいます。私は、「差別されるなんて嫌だ」と思ってきました。

けれど、私たちは、どこに生まれてくるのか選べません。親も選べません。そして、私は大きくなって気づいてみると、「誰の子に」と問われた時に、「私の親ってなんてすごいんだろう」と思いました。

私の父親がなぜ病院に入院したかといいますと、、昔は血液を買うことができませんでした。父はB型の血液で、血液のいる人に何度も何度も血液をあげて、そのために家で暮らすことができなくなり、病院暮らしになりました。

母の生き方と支えてくれたムラのおばさん達

そういう中で、母は、たった1人で梨を作りながら私たちを育ててくれたんです。よその人は、耕運機などで梨畑に行くんですが、私の母は、ずっと自分の背中に肥やしを背負って梨畑に上がり、下りる時には枯れ木を背負って下りて来ました。

昔は、今のように電気炊飯器はなくて、「くど」というものがありました。くどで背負って帰った枯れ木を燃やしてご飯を炊いて、私達に食べさせてくれた母でした。

気づいてみたら、確かに、私は、被差別部落として差別を許さないムラに育ちました。他人は、「あそのムラはなあ」と言って差別する人がいるかもしれない。でも、私はこんな父や母が大好きでした。

母は、朝早く梨畑に行き、夜遅くならないと帰ってきませんでした。その間は親がいません。隣のおばさんたちが、「早よ、来いや来いや。おばさんと一緒に風呂に入るだけ。早よ、来いや」「ご飯があるけなあ。おばさんと一緒にご飯を食べるだけな。早よ、来いや。」そう言って私達を呼んでくれました。こういうことを通して、私は、「なんて幸せだろう。温かいムラに生れたんだなあ」と感じ、今、そのことがどんなに素晴らしいことかと思っています。

ムラに生まれたからこそ持つことのできた人への感謝

私は、生まれてみたら被差別部落でした。でも、このムラに生まれたことで人への感謝を教えられ、「うれしい」という気持ちを持つことができたんです。「ありがたいなあ」そんなことが本当に心から言える。そういう生き方をしてこられたことを幸せだと思っています。

お母さんがいなかったり、お父さんがいなかったりというふうには、いろんな家にたくさん問題があり、地域の中にいろんな実態がありますが、私は今、人権教育推進委員として、子どもから相談があったり、先生から相談があった時に、ずっとその子と関わりながら、その子を楽しく学校に行かせたい。そして、「学校の中に居場所がない」と言われると、その事やその子の今の実態を先生と相談しながら、子どもの居場所を作ってもらおうよう働きかけるという仕事をしています。

他人には頼めないことが私になら言えるという関係を…

こういう仕事をさせてもらえて、私はなんて幸せだろうと思います。そして、関わる一人一人の子どもに、「おばさんに相談してよかったなあ」と思ってもらいたい。

なぜなら、私も小さい時に、隣のおばさんに「早よ、来いや。一緒にご飯を食べるだけな」と言ってもらえた。そんな地に育ったからこそ、私は、今こうしてムラの子も達や町の子も達の実態に寄り添いたいという思いで、やっぱりじっとしておられない。そして、その子が、他人には頼めないことを私なら頼める。そういう関係になりたいなあと思います。

みんなが大切な一人一人です。私がついて、一人一人がついて、この親の子で幸せだと思えたり、幸せになれる友だちがあったり、みんな一人一人が大切な尊厳を生きているということに気づいていく。

学校で1人でもさびしい人や苦しんでいる人がいれば、私から声をかけたい。そんな関わりを持ちたいなあと思います。これで私の時間を終わります。(拍手)

《コーディネーター A》

いろんな思いが溢れてきます。かつて、私は先生に差別をされたと思いを語ってくれたことがあります。この問題を、この問題の悲しみを、自分のことと受け止めることができず、地区の子どもたちを傷つけてきた学校があったり、悲しい現実があったんですね。

人間が人間として解放されていく、そんな、私たちの学校でありたいし、家族でありたい、職場でありたい、地域でありたいと思うんですね。人権を学ぶということ、同和問題を語る時こと、そのことが生きるよろこびになっていく。そんな社会を私たちは創っていきたいと思うんですね。

この後、一緒にこの問題に取り組んでおいでるCさんから話をさせていただくわけですけど、北島中学校の話になって大変恐縮なんですけど、北島の子ども達に取り組んだ、板野の人権教育研究大会の公開授業にも来ていただきました。その時に、北島の子ども達にこんな額をプレゼントしていただきました。(折り紙とちぎり絵で、青い空と大きなキラキラ輝く太陽に向かって、無数の白い鳥が飛び、花が咲き、緑あふれる台地に楽しそうに子どもたちが遊ぶ、その状況が表現された一枚の額を取り出し、会場に見えるようにかざしながら)

今、校長室にずっと大事に飾っているんですが、こう書かれています。

「生命輝いて 今を生きる」

私は、子ども達が自分の言葉で自分の生活を語る。その精一杯の姿に、やっぱり生命の輝きを見ます。

人権教育のよろこびというのは、互いの生命が輝き、「この人と出会えてよかった」「人からこんなに大切にされる」「自分につながる人をこんなに大切に思える」そんな豊かな人間関係を創っていく。そこにこの学びのよろこびがあると思うんです。

実は、今日も受付で「しおり」を配っていただきました。CさんとBさんの手づくりのしおりです。昨年の北島の3年生の子ども達全員に、朝の読書に使っておる本にぜひ活用して欲しいということで、一人一人にメッセージの書かれた、しおりをいただきました。ずっと、心と心の交流が続いています。

人権教育に取り組む中で、Cさん自身が人間としてのよろこびをいっぱいつかんでおいでた、その思いのたけを語っていただきます。どうぞよろしくをお願いします。(拍手)

《パネリスト C》

同和教育を続けてきて変わってきたこと

皆さん、こんにちは。(会場より「こんにちは」)この、鳴門の地域人権フォーラムに、3年前にもこうして前に立たせていただきました。その時には、地域で同推協の会長としての地元の取り組みですとか、今日の私の肩書きとして書いていただいています、「たんぼぼの会」についてのお話をさせていただきました。

今回、こうして前に出させていただいて、私がどんなに変わってきて、どんなに楽に生きられるようになったのか、そして、こうして同和教育を続けてきた中で、周りが少しずつでも変わってきた。そのことについて少しでも伝えられて、同和教育を大事にすることが、どれだけ大きなものになってくるのかということ、皆さんに伝えられたらと思っています。

私は、今、こうしていろいろな会に出ても、一番前に席を取り、発言の時間を与えられると、前から会場の皆さんの方を見てお話ができる人間になりました。けれども、以前の私は、他人の目や、反応や、言葉や、いろんなことを気にして、とても自分の思いを伝えるなんてできませんでした。自分の苦手だと思うことは、初めから逃げていました。自分のカッコ悪いことは、人の前にさらけ出すなんてとてもできない人間でした。

自分が出かけて行き 直に思いに触れること

でも、この同和教育と出会って来て、いろんな人と出会ったり、いろいろな思いにつながってくる中で、「ああ、不細工でもいいんだな。格好悪くてもいいや。一生懸命頑張っている自分がある、それだけでいいんだな」ということを、本当に自分で認められた。そう考えることができるようになって、生き方が楽になったなと思います。

私が、同和教育を続けてきた中で一番よかったことは、とにかく、いろいろな所に自分が出かけて行って、直にいろいろな人の思いなどに会ってこられたことだと思っています。

地域の同推員をしながら、被差別部落の学習会(小地域懇談会)に参加しました。初めて参加した時には、すごく緊張しました。「こんなことを言ったら、どう思われるんだろうか」「一生懸命伝えるつもりではいるけれど、信じてもらえるんだろうか」など、いろんなことを考えながら、すごく固まっている自分がいました。

けれども、その時に参加していたその村の人から、「自分たちのいけないところがあったら教えて欲しい。自分たちも、悪いところは直していかなければならないから」そんな真剣な語りを聞きながら、それまで、身近な人から、「あそこは気をつけないけんよ。やたらなことを言うとな後が怖いから」そう聞かされていたことを振り返りました。

私たちが一番怖いのは、身近な人から、何気ない日常の中で、さりげなく語られること。そのことは、本当に、心の中に染み込んでしまうものなのだと思います。こういういろいろな学習の場で、いろいろな思いが出てきた時には、本当にそうだろうか、疑問を持ったり考えることができます。けれども、何気ない日常の中で繰り返し聞かされることというのは、知らない間に自分の中のいろいろな思いに刷り込まれてしまうのだと、繰り返し、出会い、学ぶ中で気づいてきました。

学びを記録に残すこと 届けてよろこんでもらえること

そんな中で、私は、いろいろな学習会、研修会で学びを続けてきたことをその都度記録に残しました。その記録に残す時、わからないことはわかるまで調べ、聞き、自分の納得したところから記録づくりをしました。そして、まとめたものを仲間のもとへ届けることを通して、多くの仲間とのつながりを実感することができました。

私たちは、自分が進歩して行くこと、行動化していくことに何があるか。自分が伝えていくからその学びを広げることができるのではなく、やはり、持って行った時に、「ありがとう。私はこの話を聞きに行くことができなかつたのに、読ませてもらって勉強できる。また待っているから」そう返してくれた多くの人によって、私はたくさんの学びの場をいただいたと思っています。「また持って行きたいな」「今度はもう少しわかるように伝えたいな」と考えることができ、私自身が、自分の納得したきちんとしたものを作りたいと思った時に、学ぶ姿勢が変わりました。

研修に行く時にはかならず前の席に座って、講師と真剣勝負のように、その語りをその思いを吸収しようと学ぶようになりました。そして、この学びをきちんとまとめたい、伝えたいとの願いから、50歳前からパソコンを覚え、独学の中で失敗を繰り返しながら、いろいろな人の力も借りながら、自分自身の中で進化し続けてきたなと思います。

私たち、いつが出発の時というものではありません。気づいた時に、気づいた所から、気づいたことを進める中で、人間は死ぬまで発展途上であり、生涯学習の場なんだと思います。

私は、被差別部落の学習会に繰り返し参加する中で、「Cさん、ずっと推進員続けてよ」「こうして来てもらえることがうれしいだけな」、こんな言葉をたくさんの方からいただきました。

被差別部落の学習会に参加することを続ける中で

そして、私は被差別部落の学習会に参加する中で、被差別部落の人たちの、仲間を大切に、1人のことをみんなのこととして一生懸命に取り組む。そんな日常に出会った時に、自分の地元や、村や家庭を振り返りました。私たちの足元にこんなつながりがあるのだろうか。こんなに人を大事にしている。それを当たり前にしてしている。そんな日常があるのだろうかということを感じて、「私は、こういうつながりがある皆さんがうらやましい」そういう発言をしました。

そのことを、そのムラの人たちが何十年経っても覚えてくれていて、「私は、初めて部落外の人から部落の私たちのことをうらやましいという言葉聞いた。そのことが忘れられない」

私はそれを聞いた時に、本当に、自分の思いを出させきれない社会の現実がいっぱいあるんだな。いろんな思いはあるけれど、伝えにくい、交流がなかなか進んでいかない現実がいっぱいあるんだなということ、逆に痛感します。

今、隣にいるBさんが言いました。どこに暮らそうが、誰の子に生まれようが、一人一人の尊厳としての命がある。そのことを、本当に認め合っていける。そういう学習の場を広げていくために、この人権教育があるんだなということ、痛感します。

まわりから言われ出した「お前丸くなったな。それって人権教育のせいか」の言葉

私はこれまで、人のことを見る時に、いつも客観的に見ていました。私の義理の兄は、姉夫婦が結婚した時のことをいつも話します。「わしが初めてあいさつに来た時、おまえは斜め目線を見て、2階に上がってしまったら、全く降りて来なかった。行く度に冷たい目線で見られて、怖いなあと思っていた。でも、最近おまえ丸くなったな。それって人権教育のせいか」と。

それから、夫も、家族の者も「お母さんは丸くなった」と言います。「同和教育を続けてきて、いろんな所に行って勉強してきて、お母さんみたいな人もおらないけんだけ」と、夫が話してくれるようになりました。

でも、初めからこんな協力的な連れ合いではありませんでした。PTA活動をしていた頃、夜、家を空けることの多かった私に対し、時には玄関を閉められたことがありました。いろいろな会の後の親睦会で、残った料理を皿にまとめて持ち帰った時、帰ったとたんその皿をひっくり返されたりというような日常も、ずっと以前にはありましたが、私の夫がなぜ私に協力的になったのか。

そのきっかけには、私が自分の村の同和教育推進員になったことがありました。初総会で夫が受けてきた役職でした。その頃は、地域の中でもまだ少なかったのですが、他の役員と同等の役員扱いをきちんとしてもらった中で、自分の村の同和教育の学習会には、必ず自分で資料を作って、自分で説明しきれない時には、フォローをしていただける方をお願いをして同席していただきました。

同和教育推進協議会の会長として、地域の24集落の学習会を統一テーマで進めるようになり、その資料

作りに関わるようになって、なるべくきちんとした、伝わりやすい、正しいことを学んでいただける。そういう学びの場を作ろうと努力をしてきました。

ずっとそういう姿を見ながら、夫が地域のいろいろな場に出た時に、「お前の家のお母ちゃん、すごいなあ」度々そういう声を聞くようになり、私が何をしようとしているか、どんなことを続けているか。そのことを夫がきちんと見るようになって、私への態度、言葉かけが全く変わりました。

私の村で学習会を終えた後、「今年の学習はどうだった？」と聞くと、「まあ、こんなものでないか」と返してくれる時があります。「いやあ、これでは人はしゃべれんぞ」そんなふうにはっきり返してくれる時があります。

こんなふうには、今、夫が一番の協力者であり、毎年の学習に対して反応をかえしてくれる、資料づくりをする上での指導者でもあるんだなということを感じます。

めざしていきたい夫の生き方

私が、夫に対して一番感心するのは、私は努力をして、人のことも少しは感じられる、人の思いに寄り添える、そんな人間に変わってきました。でも、夫は特別にそんなことをするのもないのに、自然に人を大事にし、日常の中で、本当に、地域を親戚を家族を大事に暮らしています。

そのことを通しながら、「この連れ合いはすごいな」と、自分なりに納得して、この夫とすこしでも肩を並べて、同じようにさりげなく人を大事にできるような人間になっていきたいな、近づいていきたいなと思いつつ、今、こうして同和教育を続けています。

こういうふうには、人権教育、同和教育を続けるということは、決して他人のことを学ぶ学びの場ではありません。いろんな出会いを通して、いろんな思いに出会って、そのことを通して、自分はいったいどうなんだろうかと。自分の地域はいったいどうなんだろうかと、この学びを自分に返していった時に、どうしていったらいいんだろうかと学び合える。そんなふうには、自分たちが育ち合っていくための学習の場ではないかと思いつつ。

そして、私たち夫婦にとって一番よかったのは、子どもが結婚をした時に、相手の家庭がどうであれ、娘が選んだ相手を、個人を個人としてしっかり見ていくことができた。そして、周りからなにが言われた時に、私たち夫婦がきっちり返していける、その覚悟だけ持っていればいいんじゃないかと言いつつ。そのことが、20年以上同和教育を続けてきた中で一番の成果だったと思いつつ。

被差別部落の親友から教えられてこと

私の亡くなった被差別部落の心友が言いました。「なあ、Cさん。私たちは、この同和教育を続けてきた中で、苦労したことをいっぱい語ってきた。少しでもわかってほしいという願いのもとで、いろんな思いを発信してきた。でも、だんだん人権教育、同和教育の方向が変わって、今、『頑張っている人たち』、『すばらしい人たち』という学びの場が多くなった。でもなあ、私たち、いつでもそういう頑張っている人でないといけんか。すばらしい人でないといけんか。」と言いました。

そんなことはありません。頑張れる時もあります。頑張れない時もあります。それは、同和地区であろうがなかろうが、誰にでも同じようにあることだと思いつつ。そういう、本当に当たり前のことを当たり前として受け止めながら、そのことを、社会の中で通していけるようになることが大事なことだと思いつつ。

心友の葬儀とムラの人とのつながり

それから…、私は同和地区の仲間と本気でつながってきた中で、その心友は、「私はもういつ逝くかわからない。もしも私が死んだら、葬式の時に友人代表としてみんなの前であいさつをして欲しい」と言いつつ。

た。この時に、私は「弔辞を詠むという大役を、本当に私でいいんだろうか」と思いました。でも、「私のことを一番よく知っているあなたに、私の思いを伝えて欲しい」そう言ってくれました。

葬儀の席で、精一杯の思いを語った時に、背中にすすり泣きの声を聞き、翌日の法要の席で、和尚さんの講話の中にそのことを入れていただくことができ、思いが伝わったことを実感させていただきました。

そういう中で、彼女が暮らしたムラの人たちと、亡くなって2年以上になりますが、今でも、家族のような温かいつながりが続いています。

私たち、理解し合えるために何をしていくか。交流することです。語り合うことです。出会うことです。紙上研修では、人の心は変わりません。いっぱい出会う、いっぱい語り合っ、笑顔を見て、涙を見て、「ああ、これってどうなのかな」ということが自分で感じ合える。そのことがすごく大事なことだと思います。

出逢いをとことん大切に… 求めていこう仲間との絆!

皆さんに、本当にいろいろなところに出かけて行って欲しい。いろいろな人と出会うと欲しい。その時に出会った人は、その時で終わってしまえば一期一会の路傍の人です。「こんなことがあったかな…。」「そういえば、あんな人がいたかな…」過ぎ去った過去の思い出になってしまいます。でも、その一つ一つの出会いを大事にしていくことで、生涯の仲間になり合えます。本当に辛くて悲しくてたまらない時に、近くにその人がいなくても、「私にはあの人がいる」そう信じ合える仲間がいることは、生きる力につながります。

自分が、本当に命を絶ってしまおうと思うほどの辛い時であっても、それを踏みとどまらせてくれるのは、やはり、仲間の存在ではないかと思います。そういう仲間を作るのか、作るのをやめてしまうのか、それはやはり、自分自身の行動にかかってくるのではないのでしょうか。誰も作ってはくれません。自分が出会ったその人とつながりたい、語り合いたい、本当に信頼し合える仲間になりたいと思った時に、その思いを返していきながら、強い絆としてのつながりを作って欲しいなと思います。

今日、この会場にも、そういうつながりを少しずつ作らせていただいている方々の姿が見えます。私は、そういう方々のまなざしにいっぱい力をいただきながら、こうして県外からでも、いろいろな所に出かけて行くことができます。そして、思いを伝えることができるようになりました。私たち、人はいつまでも進化し続けることができます。人間死ぬまで発展途上だということを実感します。

あきらめたところからは何も始まりません。でも、自分が前を向こうとしたり、広がりを作ろうとするとところから、いろいろな可能性が無限大に生まれてくるのではないかなと思います。

こうして、鳴門の人権地域フォーラムに來させていただくようになって4年目になりました。いつもいつも、ここから大きな力をいただきます。また出かけてみたいという楽しみをいただきます。

今日も、たくさんの皆さんの真剣なまなざしの中に、たくさんの力をいただきました。これで私の時間を終わらせていただきます。今日は皆さんに出会えて、心から感謝します。本当にありがとうございました。

(拍手)

《コーディネーター A》

どうもありがとうございました。ご夫婦のことを語っていただきました。皆さん、この問題というのは、私たち家族の中の問題だと思うんです。「今日、鳴門の人権フォーラムに行ってくるよ」と言った時に、「大事な問題だからしっかり勉強してきなよ」と、言葉をかけてくれる家族である。逆に、「そんなところに行つてどうするんだ」そんな切ない言葉が返ってくる家族もある。

なかなか「わがこと」になりません。自分の痛みになりません。部落差別の現実は、やっぱり、今も血を吹きます。

実は、今、北島中学校の1年生の子ども達が前に10人座っています。1年生189名の子ども達に、この後話をしてくれる、D君の「部落の心を伝えたい シリーズNO.8『ぬくもりを感じて』」という啓発ビデオを観てもらいました。そこに映し出されたきびしい結婚差別の現実、いじめの現実に対し、子ども達が震えるような怒りを感じました。

その中の何人かの文章を、お手元の資料「学年便り」に掲載しております。中学1年にして、部落差別の中にどっぷり生きる、子ども達の現実があります。家族の現実があります。辛くてたまりません。この「学年便り」の3つ目の文章をはしょって紹介します。

私は、昔から部落差別のことについて知っていました。身内に差別をしている人がいるからです。昔から、「近寄ったらあかんよ」と教えられていました。

小さい頃から、「ふうん」という感じで、近寄ったらだめなんだと思っていたけど、小学校5年生くらいの時に差別の学習をして、今まで差別してきた自分の身内のことを思い出して、すごく恥ずかしくなりました。

今日も、何年も差別と闘って、今も心に傷を負っているDさんの映像を観て、すごく胸が痛みました。そんな辛い思いを自分はさせていたんだと思うと、自分に腹が立ちました。

私は、差別されている地域の人たちに対して、悪口を言うてはいないが、身内からの間違っただけの教を数年も信じていたことを、本当にひどいことをしたと思っています。

お盆に親戚が集まった。秋に甥が結婚する。いところが結婚する。そこに、「心配ないんか」「調べたんか」そんな会話が飛ぶ。その奥にある意味がわかっている。でも、スッと聞き流す。まだまだ厳しい現実があります。

彼は2年前にフォーラムでも語ってくれました。2年前の7月に来びしい差別の現実に向き合いながら結婚し、昨年5月に、里温ちゃんという男の子が生まれました。そして、来月2人目の子どもが生まれます。

今、ここで、必死にこの問題と向き合い、人間としての誇りを掲げて生きる、彼の姿、彼の思いを、中学生に本当に受け止めて欲しい。そんな思いで、今日北島中学校の子ども達にも来てもらいました。

会場の皆さん、私たちの家族の中にある問題、親戚の中にある問題、身近なところにある問題、そのことをどう克服していくか。「私に何ができるか」そのことを問いながら、D君の語りに出会ってくれたらと思います。では、よろしくお願いします。いこう。(拍手)

《パネリスト D》

はじめに

(立ち上がってテーブルの前に出ながら元気よく)えー、皆さんこんにちは!(会場より、「こんにちは」)僕は、座ってしゃべるのが苦手なので、立ってしゃべらせてもらおうと思います。

昨日、熊本から帰ってきました。8月は、僕はほとんど家におりませんでした。今、紹介していただいたんですが、2年前の7月12日に結婚しました。この時に、同和問題の啓発ビデオ「部落の心を伝えたい」シリーズNO.8として、『ぬくもりを感じて』という僕のドキュメンタリー映画が発売になりました。

発売になってから、全国の方から、「その中身を聞かせてほしい」という問い合わせが殺到しまして、年間100回くらい全国を回って講演をさせてもらっています。その中で、今日、僕はここに来て良かったなあと思いました。多分、僕の知っているかぎりでは、徳島の中でもこの会が一番熱い会だと思っています。そこに僕がおれるということがうれしいなと思います。

A先生からもありましたが、2年前のこのフォーラムで、僕は、自分のその時の置かれている現実を、包み隠さず、皆さん方の前で厳しい口調でお話させてもらいました。

それはなぜかという、差別とは何なのかということ、まず、皆さん方にそのままぶつけなければならぬ。そこで人間はショックを受けて、そこから「自分はどう生きていくのか」をきつと考えると思うんです。だから、今、中学生の感想を読んでもらったんですけど、多分そういう思いでいっぱいだと思います。

結婚前 先輩から言われた「会いに行け」

僕は、神山町出身のEちゃんという、2歳下のかわいらしい女の子と、2005年の7月12日から付き合い始めまして、最後は、両親、兄弟、親戚とすべてが反対の方向に向いていました。「お父さん、お母さんに会いに行け」という先輩がいたんですが、僕は、「絶対に会いに行かない」と言いました。なぜか。相手が「会わん」と言っているのに、僕がどんなに会いに行ってもこれは絶対に会えません。

でも、僕らの先輩は言ってくれました。

「D君、わしらは、20年、30年前は、この状況でも家の前まで、20回、30回行ってた。だけど、行った時に、茶わん割られて、塩をふられて、『2度とくるな』と言われてたり、警察を呼んで、『この男を逮捕してくれ』と言われる。そんな事件が多発したよ。でも、僕らの仲間は、20回、30回行くうちに、話し合いから心が解けて、今は孫もできて幸せになっているんだ。」こんな話をいっぱい聞いてきました。

でも、僕は、この話を聞いた時に思いました。「僕らの先輩は、なぜこんなことをしなければいけないのかな。この先輩に、これをさせたのは何なんだ。」

そして、僕は思いました。「同和教育がなかった時代は、これをしなければ結婚できなかった時代もあったんだろう。同和教育を、なぜ20年、30年やってきたか。同じ思いを後輩にさせんために同和教育をやってきたんや」と。だから、もしも僕が先輩と同じことをすれば、今、ここにきて前に座っている中学生、高校生に「おまえも真似をしてくれ」と、言わないかんでしょう。

でも、今は時代が違いますよ。徳島県全般に同和教育を一生懸命やってきた。ですから、僕が先輩と同じことをすると、先輩たちがやってきた同和教育を僕が裏切ることになるんですよ。だから、僕は、この状況では絶対に会いに行かないと言いました。

Eちゃんから言われた「幸せになるために結婚しようと思う」

そんな中、月日が流れて、2006年7月に婚姻届を出しに行くことになりました。僕の連れ合いのEちゃんが言いました。「親がどれだけ反対しても、親戚がどれだけ反対しても、私は幸せになるために結婚しようと思う」と。僕はその時に、(勢いよく、まっすぐに片手を前に伸ばし、いっばいの笑顔の大声で)「来たー！！結婚できる！！」(会場より、驚きと笑いがあふれる)憲法24条に書いてあります。「結婚は、両性の合意に基づいて成立する」

親がどうこう、兄弟がどうこう、親戚がどうこう、そんなこと一切関係ない。僕は、結婚差別の事例を、全国を回って1600件以上見ていますが、2人が結婚したいと思った時に結婚できるんです。

それで、僕は、「つきあい始めて1年目の記念日、7月12日に婚姻届を出しにいこう」と言いました。すると、Eがまじめな顔で、「7月12日はちょっとやめてくれん？」と言いました。よほど忙しい用事があるんだなと思って、何があるのかを聞くと、(一瞬の間をおき)7月12日は仏滅だ」と言うんです。(会場から笑い)僕は、その時、「はあ…？今の若い人が何が仏滅や」と思いました。

今、離婚が急増しています。離婚した夫婦の統計を取ってみてください。あの、離婚した夫婦の大半が、「大安」に結婚していますから。(会場から笑い)そうでしょう？そんなこと関係ない大迷信なんです。(ここにこと、会場に問いかけるように)あんなもんで幸せになれたら苦労せんでしょう。そうでしょう？皆さん。

記念日の方が大事だからと、7月12日に婚姻届を出しに行きました。Eは、婚姻届を出したことをお父さ

んお母さんに手紙で伝えました。なぜか。結婚する前に「結婚します」とでも言おうものなら、Eが監禁されるのがわかっていたんです。だから、婚姻届を出した後で、「結婚しました」と、お父さん、お母さんに手紙を送りました。

結婚したことを手紙でEの両親に連絡

そうしたら、それまで、お父さんお母さんから嫌がらせの電話がかかって来ていたんですが、結婚をしたという報告を出してから、電話が一切“ピシーッ”と(身振り、手振りをしながら)なくなりました。何の連絡もない。

皆さん、当たり前です。結婚差別というのは、結婚することを反対しているのであって、結婚してしまえば反対する理由がないでしょう。(前の中学生、高校生を笑顔で見ながら)そうでしょう？結婚が、もう成立しているんですから。

そうしたら、Eが、人権意識が高まってきていますから、怒るんですよ。例えば、「結婚して、名字がDに変わったら、よその子になるのか。親子の縁が切れるのか」と。

違います。親子の絆というのは、縁というのは、切っても切れない強い糸でつながっています。しばらくして、Eが妊娠しました。だから、僕は、お父さんお母さんのことは一切何も言いませんでした。幸せな状態のまま赤ちゃんを産んで欲しいと思いました。赤ちゃんが生まれるということがうれしいですね。そんな中で、去年の5月21日、男の子が生まれました。

息子の名前に込めた願い

僕は、息子にこういう名前をつけました。「ふるさと」の「里」に「温かい」という字を書いて、「里温(りおん)」と。ふるさとのぬくもりを一身に受けて、温かい人間になって欲しいという願いと、もうひとつは、大きくなった時に、そのぬくもりを周りの人に伝えていける人間になってほしいという願いを込めました。

僕は里温が生まれた時に、里温の写真を、神山町のおじいちゃん、おばあちゃんに何十枚でも送っておくとEに言いました。当たり前です。自分の孫の写真を見て、うれしくないおじいちゃんおばあちゃんはいません。そうしたら、1ヶ月くらいすると、免疫ができて何もしなくても行けるようになるんですね。

僕は、その頃にEに言いました。「里温が、神山町のおじいちゃんおばあちゃんに会いたいと言いきるからな」と。さすがに、僕の息子でも、生まれて1ヶ月では、会いたいとはよう言いません。(会場から笑い)でも、僕には会いたいと言いきるように聞こえたんです。

「里温が、おじいちゃんおばあちゃんに会いたいと言いきるから、いつでも連れて帰らないよ。1人で行くのが不安だったら、いつでもついて行ってあげるから、言いきらないよ」と、僕はEに言いました。もし、帰るなどと言われても、自分の家なんだからいつでも帰ったらいいいんですよ。

Eは、「うーん…」と考えています。Eには、行きたくない理由が2つあります。

1つ、自分たちは何も悪いことはしていない。お父さんお母さんが悪いのに、なぜ、自分が下手に出なければならぬのか。

もう1つ、例えば、僕とEと里温と3人でお父さんお母さんの前に行った時に、お父さんお母さんが僕に対してどれだけひどい仕打ちをするかわからない。それを考えたら辛くていられないんですよ。

だから、僕はこう言いました。「そんなもの全然関係ない。今回は目的が違う。意味が違う。実の血のつながった孫の里温が会いに行く。Eが実家に帰るのでもない。僕が頭を下げてあいさつをしに行くのでもない。行った時に、お父さんお母さんがひどい仕打ちをしても、僕にはきちんと対応できるだけの、知識と技術と経験があるから心配しなくていいよ」と言いました。

がないんです。Dさんたちのメンバーと一緒に勉強させてもらえませんか？」と言われてから、ずっとつきあがあります。この勉強の会だけでなく、祭りがあったら焼き鳥の手伝いに行ったり、川原でバーベキューをしたり、こちらで何かする時には手伝いに来てくれる。

そういう交流が何年もあるから、青年会の人の中には、僕が被差別部落の人間だという気持ちなんか微塵もない。だからね、さっきCさんが大事なことを言ってくれました。机の上で学習しても人間は絶対変わりません。人間というのは、そこに住んでいる人と心の底から交流して少しずつ変わっていく。

Eのお父さんお母さんの変化

だから、僕は神山町が好きなんだという話をした時、それまで申し訳なさそうな顔をしていたお母さんが笑顔に変わりました。

僕ね、今まで幸せな生き方を先輩にさせてもらっています。差別から解放される瞬間の表情を、これまで何百人も見せてきています。でも、不思議なことに全員同じ顔をしていますよ。人間が本来するはずの温かい優しい顔をして、僕たち3人を、手を振って「また来ないよ」と言って見送ってくれました。何のことはありません。これ以来毎週帰っています。(笑い)

帰った時に、お父さんお母さんがすごく大事にしてくれます。特にお母さんは、オムツを替える、ミルクを飲ませる、風呂に入れる。そんなことはみな当たり前です。(溢れる笑顔でまねをしながら)里温に向かって、「バーバ、ばあちゃん」というふうにもものすごく大事にしてくれます。そして、結婚を反対していた近所の人のところや親戚に里温を連れて行きます。「これ、うちの孫だよ。かわいい顔をしとるじゃろ。男前じゃろ」と言いながら、連れて回っていっぱい祝儀をもらってきます。(笑い)

この年明けにも、お父さんに会いました。僕は、「いつも、里温のことを大事にしてくれてありがとうございます」と言ったんです。お父さんが、「いつも全国のお土産をありがとう。うちの娘は、頼りないところがあるけど、これからもよろしく頼みます」と言ってくれました。

初節句の時には、立派なかぶとの人形を買っていただきました。今、あの頃のことを言う人は1人もいません。

差別をなくす行動…Eのお母さんの場合

例えば、お母さんにとって、差別をなくすということは勉強をすることではないんです。お母さんにとって差別をなくす行動というのは、親戚や近所の人たちのところに里温を抱っこして連れて行くことなんです。

ですから、僕は今偉そうなことを言っていますが、何も特別なことはしていません。頭を下げて何かをする。そんなことはしていません。僕はただ、人間が本来するはずの当たり前のことを当たり前にやっただけです。

先輩たちのおかげで、今、当たり前のことが当たり前のこととして通る時代がやってきました。僕たちの時代は、当たり前のことを当たり前に、なおかつさわやかにやっていこうと思います。(いっぱいの笑顔で)そういう時代に来ているんじゃないかなと思います。

だから、僕は、今僕らにこういうふうにした先輩たちにすごく感謝しながら、Eのお父さんお母さんに感謝しながら、これからの人生を生きていきたいと思います。以上で終わります。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございました。温かいものが会場いっぱい溢れます。皆さん、人間の幸せって何のだろうな、人間が生きるよろこびというのは、どこから生まれてくるんだろうなと思います。彼のエネルギー、彼の言葉にやっぱり力をもらいます。幸せに生きていきたいですね。幸せをつかんでいきたいですね。

そのために学びがあるし、出会いがあるし、つながりがあるんだと思います。高校時代からこのとおりです。このエネルギーです。(会場に笑いが起こる)このノリです。高校時代はもっとかっこよかったです。今もかっこいいですけどね。(コーディネーターの言葉をテレながら、うれしそうに聞くDさんの姿がある)

一生懸命の姿が、当時の高校生の中に本当に広がったんです。私は、鳥取であった「全国高校生集会」に彼らと一緒にいったんです。あの全国の集会で、徳島の高校生が語って語ってしました。それが他県の高校生にいっぱい力を与えていきます。

出会いとつながりです。そんな高校であり、高校生であって欲しいと、今の高校生にも強く思います。輝いて輝いていく、そんな高校生活を送って欲しい。そんな願いを強く持ちます。

差別をなくすということ、人間が人間として大切にされるということ、そんなよろこびをつかんでいく中学生活、高校生活を送って欲しいと思います。

安心して自分のことが言える。切ないことが、苦しいことが言える。嫌なことが嫌だと言える。お互いを信頼し、尊敬し、この学校に来てよかった、この仲間と出会えてよかったと言える。みんながそのいい関係を作っていける。この職場の仲間が良かった。この地域に暮して良かったと思える、そういうつながりを創っていくのがこのフォーラムの意味だと思います。

前の3人が語ってくれた言葉を、皆さんに生で聞いてもらいました。これは、やっぱり、映像で流れても、この場においていただいた皆さんに大きな意味を持ちます。8月の終わりに、こんなフォーラムがあった。あのDという青年は、あれは何なんだろう。あのエネルギーは何なんだろう。生き生きと、夫婦の中で、家族の中で同和問題を語って行く。こんなに必死に、同和問題を「わがこと」として考えて生きるCさんの姿。部落差別の中を必死で生き抜いておいでたBさんとの出会いも、涙が出ました。笑いもありました。

この、前半の3人の語りを大事にさせていただいて、日常の中で生かしていただき、この映像が、鳴門の地に広がっていく。同和問題を「わがこと」として考える。そんな、おろかな差別に振り回される切ない人生ではなくて、そんなものを笑い飛ばして生き生きと生きられる、皆が誇りと自信を持って生きられる、そんな地域社会を創っていく。そんな一人一人になっていく。そんな学びがここにあったということ、そんな学びに出会ったことを誇りとして、私たちは解放されていきたいなと思います。10分ほど休憩を取らせていただきます。長時間、窮屈な中を頑張らせていただきました。

前半終了

=意見交換=

《コーディネーター A》

私たちの行動が確かな力を生んでいきます。後ろに、里温ちゃんも来てくれています。(会場の後ろから、「アアッ!!」元気のいい里温君の声が起こり、会場に笑いが溢れる。コーディネーターもニコニコしながら)里温ちゃんもしっかり返してくれました。D君の連れ合いさん、Eちゃんも来てくれています。この時間の後半に彼女にも思いのたけを語ってもらいます。

中学生、高校生もいろんな思いを持って来てくれました。前半のパネリスト3人の思いを受けて、こんな思いが私の中にある。僕の中にある。また、私たちの職場の中で、私たちの学校で、地域社会の中で、まだまだつらいことがある。でも、それを我慢して我慢して過ごす。いじめがあるのに、差別があるのに、ないことにして過ごす。そんな関係じゃなくて、「今」「ここ」にある問題をきちんと直視し、それを見事に克服していく、そんな日常をつくっていくためのこのフォーラムだと思うんです。

多くの人の思いに出会って、私たちの生活がまた高まっていく。生きるよろこびをつかんでいく。そんな時間にしていきたいなと思います。(前列の目の前に座っている高校生に、ニコニコしながら)いこうか?高校生の言いたくて、言いたくて、たまらん思いがここにあります。(会場の後ろから、時々、里温君の元気の

よい大きな声が会場に響く。コーディネーターは、前の高校生に促すようにいこうか。里温ちゃんに負けんようにね。(会場から笑いが起こる)

《フロア 高校生》

(フロアを向いて前に立ち、しっかりと語り始める)こんにちは。(会場より、「こんにちは」)私が通っている高校で、入学してからホームルーム活動で人権学習をして、班ごとに分かれて話し合いをして、その後で班の代表がみんなの前で発表するという授業がありました。

その時に、全員が班で話す時に、楽しそうに騒いでいて人の話を全く聞いてくれませんでした。私は委員長なので、皆に、「自分が、聞いてくれなかったら嫌だから、ちゃんと聞こうよ」って言ったけど、無視されて、辛くて、こんなのあるのかなと思いました。

「何でも、困ったことがあったら言って来いよ。」と言ってくれた先生がいたので、話をしに行きました。「高校でも、全体学習をやってみたらどうですか？」と言いにいったんですけど、その時、先生に、「もし、全体学習で『自分が部落出身だ』と宣言した時に怖い」と言われて、「私たちがそういうふうには言わせないようにします」って言ったけど、今はインターネットがあって、何でも書き込まれてどこにでも広がっていくんだ」と言われて、(涙ぐみながら、言葉を捜しながら話を続ける)先生にそうやってあきらめさせられて、…できなくなりました。

昔の人が、部落差別の中を闘いながら生きてきたということは、今、先生の中では、なかったことと言うのはおかしいですが、流されているような気がします。私は、高校生活をしていて、女子高生って楽しいと思うんですが、…なんか淋しい。(涙をふきながら)上辺だけのような気がします。

教室の背面黒板に、「〇〇が死んだ」と、ある友だちの名前が書かれていて、「その背面黒板に名前の書かれた人が、本当に死んだら後悔しかせんのかな」と思ってしまいました。(途中、何度も涙をこらえて声を詰まらせながら)最近、友だちが事故で死んでしまって…。

小学校の時に、先生に「一番大事なものは何ですか？」と聞かれて、全員が「自分の生命」と答えてわかっていたのに、高校に入って、初めて友だち同士で「死ね」と言ったりしていて、びっくりしたけど、自分もそれに慣れて、つい最近その事故で友だちがなくなるまで、「死ね」という言葉に対しても、周りも無意識に言っているし、悪気もないし、慣れてきているんだと思います。

ニュースでも、「自殺」とか「殺人」とか、毎日のように流れていて、当たり前のようにになって何も思わないようになってきているのだと思います。こういうニュースを最初に聞いた時には、びっくりしたけど、私たちが「死ね」と言っているのと同じで、慣れというのも怖いと思います。

人権とか差別とか言う前に、何か根本的な問題があるような気がします。暗い話になるけど、…私が時々思うことがあって、私がもし、今日、何かの形で死ぬようなことがあった時に、何をしておけばよかったと思うのかなと考えて、親とけんかをして、「もし、そのまま死んだら、謝っておけばよかったと思うから、すぐ謝ろう」と思うし、友だちにも嫌なことは言えんし…。

そういうふうに考えていくと、人をいじめたりとかもできんし、差別もできないと思います。そういう根本的な問題もあると思うので、私も、「高校生集会」の運営委員会ではがんばっていきます。(恥ずかしそうにニコニコしながら、隣の中学生達に向かいながら)中学生にも、こんな先輩がいることを知ってほしいと思いました。終わります。(拍手)

《コーディネーター A》

皆さん、ほんまの話をしませんか？本当の気持ちと言える。安心して自分が出せる。切ないことが切ないと言える。しんどいことがしんどいと言える。まだ、こんな現実がある。このことは、本当に苦しいです。

ついこの間も、高校生に思いのたけを語ってもらいました。「本当は、言いたくないんだけど、クラスの中で、家庭の中で、その一言で同和地区の仲間が何も言えんようになる、そんな賤称語を平気で言う友だちがいる。『嫌だなあ』『嫌だなあ』と思うけど、それを言い出せない自分がある。その、空気の中でじっと耐える自分がある。きちっと自分を変えたい」と話してくれました。

今、高校生が語ってくれたように、顔が見えなくて、姿が見えなかったら、差別し放題のインターネットの書き込みがあります。人間って、こんなにむごいのか。人間って、こんなに残酷なのか。こんなに無茶苦茶なのかと思う現実があります。だからこそ、心の教育、心の癒しがあると思うんです。人間が人間として大事にされていく。そんな学びの場があると思うんです。

このフォーラムを通して、思いっきり発言していきたい。自分を磨いていきたい。そして、職場の中で、地域社会の中で、人間が人間として大事にされる関係をつくっていく。そういう自分をつくっていくこれからの時間になればと思います。

高校生の彼女が精一杯語ってくれました。どう聞いたでしょうか。つながってくれたらうれしいです。…いきましょか。

《フロア S》

いろいろ言いたいことはあるんですが、今、高校生の話を聞かせてもらって、…僕は、中学生の時に部落差別の現場に出会って、それに負けずに立ち向かっていく仲間と出会って、負けずに一生懸命生活していくべきなんだと気づかせてもらって、高校、大学と勉強してきて、今、徳島市内で「鳴門金時」をつくって生活をしています。

僕も、自分が入った高校を変えたいとか、自分の思っていることを安心して話せるような関係をつくりたいと思って高校に入学したんですが、僕の入学した高校では、安心して話ができる関係ではなくて、日常的にちゃかし合いや中傷などボンボンぶつけ合って、今、思い出してもつらいことがいっぱいありました。

僕はそういう空間を過ごしてきて、自分の高校生活は、自分を偽って逃げて逃げて、…今思ってもいい思い出はないです。

さっきの高校生の話を聞かせてもらって、自分の過去を振り返ってみて、僕も差別される立場におるから、みんなに「一生懸命勉強しよう」って言いたかったけど、相談もしたけど、僕の場合はそういうことが言えませんでした。

いろいろ言いたいことがあって、頭がごちゃごちゃなんですけど、(話しながら、一生懸命言葉を捜す姿がある。そして思い切ったように言葉を続ける。)自分の思っていること、信じることを一步一步進んでいくこと、歩き続けることというのをよくA先生に言われるんですが、思っていることを安心して話せる場というのは、このフォーラムの空間しかないのかなと思ったりするんです。

去年、このフォーラムでパネリストとしていろいろお話させていただいて、最近、僕が農業を思っていることは、僕の住んでいる村では、というか、僕の家族は…、上手くは言えませんが、今、僕は母方の祖母と、妻と僕の4人で生活をしているんですが、やっぱり、じいちゃん、ばあちゃんは、閉鎖的な考えを持っていて、平気で他人のことを悪く言うてしまうんです。

そういう人と今一緒に暮らしていて、いいところもいっぱいあるんですが、悪く言ったりしている時に注意しても聞いてくれんし、直して欲しいと思っても、しみついたものはなかなか変わらないと言うんですね。仕事と一緒に顔を合わさないかんし、今日も、ここに来るまで朝から昼まで、一緒に仕事をしてきました。

僕は、仕事も大事ですが、人権の勉強もしていきたいから、「今日、午後から行かしてもらおうわ」と言ったら、「そうか。その勉強も大事だからな」とは言ってくれたんですけど、「そうして勉強していたら、世の中って変わっていくんか」とか、「そんなことしても、差別をしてしまう意識を持っている人はしてしまう

んじゃないか」とか、わけのわからないことを言われたんですけど、最近、僕はすごく悩んでいます。

こういう、人権について、いろんな思いについて学べる空間というのは、すごく大事だということは、ずっと心の底から思っているんですが…。(しばらく考えながら)自分が暮らしている空間というか、自分が今暮らしている村のいろんなことを決める会にも参加しているんですが、僕の見えている範囲なんです…。やっぱり、全然浸透していないんですよ。他のところでは浸透しているところもいっぱいあると思うし…。

僕の中では…、人権のことを考えるのは大切なことってわかっているんですが…、自分のしていることは…これでいけているのかなと思ったりしています。

今、自分の立っている空間というのは、自分を偽らなければならないところに立っていると思っっているんです。僕の上司みたいな人が、平気で悪口を言っているのも止められんし、じいちゃんばあちゃんの、いろいろ言ってしまう切ないこととかも、僕が人権意識をしっかりと持っていてしまうので、一緒にいたら朝から晩まで言い合いになってしまうんです。

でも、僕もいいところもあるし、悪いところもいっぱいあるし、失敗とかもすると思いますが、人権について考えることがみんなが幸せになれることだと信じているので、これからも自分の思いを信じて、少しでも温かい人間関係をつくっていけるように、農業も一生懸命やっっていこうと思います。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

皆さん、この会場で1年ぶりという方もたくさんおられます。初めてという方もおられます。でも、揺れて揺れてする自分、これでいいんだろうかと思う自分。そんな自分を安心して語れる。そんな学びの場、それがこのフォーラムになっているのではないかと、毎回毎回思います。

道は険しいです。人間の意識が変わるといのはなかなか厳しいです。だからこそ、歩き続けていくし、つながり続けて行くんだと思います。2人の若者の思い…。どう聞いたでしょうか。思いが、どんどんどんどん広がって欲しいです。挙手していただけたらうれしいです。(後ろの方で手が挙がる)いきましようか。

《フロア Y》

失礼します。愛媛県の一歩南の町から来ました。今日のこのフォーラムは、A先生から教えていただきました。

私は今大学1年生ですが、私の町でも、2月に毎年こういう「人権ふおーらむ」をしているんですが、今年、私の町の「人権ふおーらむ」で、パネリストとして、町の人の前では発表しました。その時も、A先生がコーディネーターをしてくださったんですが、私がこれまで考えたこととか、いろいろ人権の活動をしたこととかを話しました。

私たちの町にも、被差別部落があって、私の住んでいるところがそうなんです、高校1年生の時に、「解放未来塾」という人権のことを勉強する会が始まりました。その活動のことを、小学校の先生が町のこういう「人権ふおーらむ」で話をしてくださって、それまで、私の町では被差別部落がないことはないんですが、隠された形になっていました。(「どう言おう」そんな表情で隣の母親と相談しながら、)…その先生が、「人権ふおーらむ」で話してくださったことによって、部落の存在が、「ないこと」が「あること」になって、過ごし易くなったというか、居場所ができた気がして、それを聞いた時に、「私もクラスの子に話してみよう」と思ったんです。

その年に、高校の先生が考えていた「ホームルーム」とは違う形でしたが、私が、「被差別部落出身ということをお話したいので、話す場所をくださいと言ったら、先生が「いいよ」と言ってくださって、人権学習のホームルームでみんなが輪になって、私が最初に、「私は、被差別部落出身なんよ」と言った時に、初め

はポツポツとしか意見が出なかったんですが、次第に友だちが、人に言えんようなことを話してくれて、結局、そのホームルームの時間だけでは足りなくて、昼休憩にも入って、お弁当を食べる時間も削って、本当にいい時間を過ごしたなと思ったんです。そういう話を2月の私の町の「人権ふぉーらむ」の場で話しました。

私の場合は、話したくて話したくて、正直にみんなに言いたくなって話したんですが…、(考えながら)…私の場合は、環境もよかったし、言える場があってよかったんですが、もし、そういう環境等が悪くて、自分が話すのは嫌だなと思ったら、別にみんなに言う必要はないと思います。誰か仲の良い友だちがいて、その子に話ができたら、気持ちが全然違うと思うんですよ。

私の場合は、友だちを呼んで、「解放未来塾」の活動などにも一緒に来てもらったりしたので、部落外の子も一緒に勉強できて仲良くなったと思います。

一度に変えてやろうと思えば、すごいしんどいと思うので、ちょっとずつ変えたら、多分、みんな段々と変わっていくと思うので、頑張ってくださいと思います。

《コーディネーター A》

ありがとうございます。いろんな立場、いろんなところで頑張っておられる皆さんが集まっています。フロアから3人が語ってくれました。限られた時間を大事にしていきたいと思います。より、多くの人の思いが溢れる時間になればと思います。いかがでしょうか。じゃあ、いきましょう。

《フロア 青年》

皆さん、こんにちは。西部青年の会『友輝』のメンバーです。今、いろんな意見を聞いて、(話しながら、ゆっくり前に移動してフロアを向きながら)パネリストみたいで、こういうところで話すのはちょっと嫌なんですけど…、(会場から笑い)高校の時を思い出しました。

僕も、高校に入った時に、自分を語れる場があるんだろうかと思うような、おちょくり合いというか、中傷のし合いという状況で、高校では人権活動なんかできんなと思ったんですね。でも、毎回、毎回、「同和教育のロングホームルーム」をする毎に、自分の中に葛藤ができ、もやもやが増えていき、「何かを変えたいな」と思って相談した時に、高校3年の時の担任の先生が、「授業をやってみるか？」と言いました。「俺でできるんか」「俺で変わるんかな」とごつい不安でした。「変えれなかったらどうしよう」とずっと思ってきて、仲の良い友だちだけに自分が部落に住んでいると伝えました。

そんな中で、僕が授業をしても、先生がするホームルームと一緒になんですよ。話を聞いてくれません。僕は、そのホームルームを運営していくうちに気づいたんです。「それはそうだ。本気で話さんかったら、絶対わかってくれんわ!」と思ったんです。

(ニコニコしながら)僕は、思い立ったら即行動の暴走派なんで、クラスの皆の前で言いました。「俺、部落の人間なんよ。皆、もっと聞いて欲しい。聞いて…」そうしたら、その瞬間、僕は背筋がズバーッと凍りました。

「もしかしたら差別されるかもしれん。自分が立場宣言をしたことによって、部落差別を受けるかもしれない」と思いました。そうすると、3分くらい沈黙が続いて、ある女の子が「私、こんな近くに部落の子がおると思わなかった。今までは、めっちゃよそごとやったし、私は関わることはないと思っていた。だけど、これからは改めて考えていきたい」と言ってくれました。

それを言ってくれたのをきっかけに、いろんな人が手を挙げて言ってくれたんです。自分は、小学校からこの活動をしていたんですが、高校に入って、さっきD君の話の中にもあったんですが、「人を変えるよろこび」ってこれなんだと思いました。

さっきも言ってくれたけど、そんなに難しいことをせんでもいいと思います。ちょっとずつ、ちょっとずつ、自分が語れるような友だちをつくって、A先生からいろんなところでいろんな思いを語り合っていく学習を習うけど、今度は自分がみんなにしていく。それが本当の仲間づくりだと思うし、語り合いの学習の本当の意味だと思うので、ちょっとずつでいいから、やっていったらいいと思います。以上です。(拍手)

《コーディネーター A》

皆さん。本当に考えていきませんか。自分を精一杯伝えていかなければ本気になってくれない空気。そうじゃなくて、一人ひとりが自分のあるがままを安心して伝える。それを聞いて返していく。本当の話ができる。そういう職場の関係、つながりを、私たちはつくっていききたい。

その中の1つに、同和地区に生まれたっていうことを、自分が安心して語れたという空気がそこにある。自分の本当の思いを伝えたら、本気で返してくれる仲間がいる。そういう人間のつながりが、地域社会の中にできていった時に、私たちが人間として生きていることがこんなに誇らしい。こんなにうれしいことなんだ。そんな実感が持てると思うんです。

私に何ができるのか。部落に生まれていない私に何ができるんだろう。今を生きる私に何ができるんだろう。そんな問いかけをしていく。それが私たちの生命を本当に輝いたものにしていく。そんな営みであると思うんです。精一杯の語り、精一杯の語りを生んでいきます。そんなつながりの中で、私たちは生かされていくんだと思います。挙手をしていただけたらうれしいです。いきましょう。(思いをいっぱいにして、何かを言いたそうにしている前の席の高校生を促しながら)前の高校生、いこうか。

《フロア 高校生》

(大判のタオルハンカチを持ち、前に出て、何度も泣きながら言葉を捜しながら語り始める)私は…、高校の先生を許せないんです。担任の先生も人権担当の先生も、全然、人権のこと頑張らなくて…。人権の問題を学生にさせるなら…、教育に関わる殆どの人たちがちゃんと人権問題をやっていなかったら、学生も何も学ばないし、会とかを開いても、上の人がちゃんとしていなかったら、私にしたらその会も無意味で、何でこんな会をするのかという感じになってしまっ…。

私は…、人権問題の学習は、性別も、年令も、自分の生まれた地区も何も関係なく、みな同じ平等な場所で人権を語るべきだと思います。(にっこりして)すみませんが、名前もわからないんですけど、さっき、家族のことを話していた人に…。

私の親も、全く人権に関心がないわけではないんですが、やっぱりおかしくて、でも、高校に入った時の人権担当の先生が、「自分の親を変えることができるのは自分だけだし、子どもがケンカするくらい言わなかったら、親も変えられない」と言ってくれました。

その先生は、人権担当を降りてしまったんですけど、私は、自分の意見の方が正しい、間違っていないと思ったので、今親とケンカしているんですけど、その、じいちゃんやいろんな人の考え方を変えたかったら、(ニコツとして)ケンカしてください。(会場から笑いが起こる)

私は、とにかく、自分自身が本気でぶつからないと、自分のクラスも変えられないし、周りも変えられないし、自分の場の空気も変えないと、周りもわかってくれないということを最近知って…。学校でも、会を開いた時もみんな聞いてくれなくて…、その時には、泣かずに怒ったんですけど、私は、怒ったのは間違いで、怒らずに、今みたいに泣きながら自分の考えを言わないと人が気持ちをわかってくれないとわかりました。

(笑顔をいっぱいにして、元気よく)最後に言いたいのは、小学生、中学生、高校生。本当に、人権のことをわかって欲しいのなら、地域の人も、先生も、偉い人も、本当に人権についてわからないと意味がないし、

もし、私が先生とケンカして退学や謹慎処分を受けたら、(元氣よく)私は、教育委員会に訴えます!(会場内、爆笑と拍手が起こる)「私は正しいことを言っているのに、学校がおかしいのところがう」と言って必ず訴えます。

教育委員会にも手紙を出してあるんですけど…、返事はまだ返ってきていません。(会場より笑い)やっぱり、おかしいことがわかっているのに、それを変えようとしなない大人の意見も間違っているし、…とにかく、ケンカをしてください!そして、自分の本当に正しい人権の意識を持って人権活動をして欲しいと思います!どうもすみませんでした。(笑顔いっぱい席に帰り、会場から大きな拍手が起こる)

《コーディネーター A》

溢れる思いがあります。切ない現実もあります。でも、学び続けられないかんし、歩き続けられないかんし、関係をつくり続けな、根本的な問題の解決にはなりません。私たちの言葉が、私たちの語りが、多くの人の中にいっばいの力を生んでいきます。そんな時間を大事にしていきたいと思います。(中ほどの席を手で示しながら)じゃあ、会長さんへマイクお願いします。

《フロア 男性》

失礼します。北島町の同和教育推進協議会の会長をしております。今、若い方の語りを聞いておまして、私の考えていることをちょっと話をさせていただきます。実は、身体の調子がすぐれず、どうしようかなと思っていたんですが、思い切って出てきました。

パネリストの3人の話を聞きまして、私自身が「これはいかん!」と思いました。実は、北島町では、毎年地区懇談会を行なっているわけですが、今まで参加者が急上昇しておったんですが、昨年度、ボカーンと落ちてしまいました。今まで順調に参加していただいていたわけですが、昨年度の結果を受けて、私ども真剣に考えました。

パネリスト3人のお話を聞かせていただき、地区懇談会で、頭から「差別をなくそう」ということではなく、自分が参加している人に本音の話をしていく。そこに3人のお話があり、「人と人とがつながる人権学習」の意味があるのではないかと思います。

そして、今、若い方の話を聞き、もう少し、「人と人とのつながり」ということを通して、人間の生きるすばらしさというものを培っていくということを地区懇談会に活かしていきたいと思います。

A先生は、私の尊敬している先生の一人なんですが、本町に来ていただきまして、子どもがグーッと変わりました。卒業式、その他の会に参加しましても、本当にすばらしい中学生の姿を見せていただきました。これも、先生が、人間として子どもたちに語りかけていただいているわけですし、北島町といたしましても、これは、A先生だけではなく、私たち自身からやっぺいいかないかんなど、改めて感じております。今後とも、よろしくをお願いします。(拍手)

《フロア 女性》

愛媛県の宇和島市から来ました。私は行政の人間です。先ほど、泣きながら「先生に思いが伝わらない」と言っていた、彼女のような若い人の思いを、これ以上増やしたくないと、理想論かもしれませんが、そう受け止めています。そのために、私は今の仕事を真剣に取り組んでいきたいと思っています。

ちょっと、個人的なことなんですが、Dさんにご相談したいことがあります。私の友人。現在36歳男性です。彼が結婚したのは7年前でした。当時付き合っていた女性がいわゆる同和地区の女性でした。子どもができました。とてもうれしそうにしていました。

けれども、私の友人の母親は、「会いたくない」と彼女に会おうともしませんでした。彼女は、小さい時

から自分の立場をわかっているのに、結婚という問題が出てきた時に、相手の方に迷惑をかけるのではと言って身を引こうとされたんですが、彼は真剣に彼女を守りました。

あれから8年経ち、今2人の子どもがいるんですが、未だに、彼の母親は、お嫁さんにも孫にも会ったことがありません。子どもが生まれれば会ってもらえるんじゃないかと期待しておりました。結婚後、彼の家に初めて出した年賀状。これは、彼の妹の字で封筒に入れて送り返されてきました。

彼は、家族と共に何度も帰ろうとしましたが、家の敷居をまたぐことも許されません。彼は、それでもあきらめませんでした。母の日には花束を送り、誕生日にはプレゼントを送り、それはすべてそのままの形で送り返されてきます。

彼は、日々努力しています。彼女はとても心の優しい女の子で、そんな状態ですが、泣き言一つ言いません。「私はここに生まれただけで、私は私であって、そういうふうにあなたの家族から思われるのならそれは仕方がない。私と実家との問題ではないんだから、無理しなくていいよ」と言います。

うちの母も、その私の友人と仲がいいんですが、彼の母親の気持ちがわかるというんですね。両方の立場がわかるというんですけれども、この話になると、私と母はけんかになります。私の母も、彼の結婚を認めようとしません。せめて彼女に会って話をして欲しいんです。彼女がどれだけすばらしく、優しく強くて心の強い女性か知って欲しいと思います。

それでも受け入れられないというのであれば仕方がないと思うのですが、これから彼は、どうすれば分かり合えるのかなと思っています。私も、彼の母親と交渉しようとしたんですが、友人ということだけで断られました。すみません。個人的なことで長くなりました。

《パネリスト D》

これは、よくあるパターンですが、36歳の部落外の男性と、女性が被差別部落の方ですね。こういうお話を聞いていて、わかる人はわかると思うんですが、はっきり言って部落外の男性はある程度しっかりした人だと思います。

女の子が被差別部落の子で、部落外の男の子が揺れていたなら、子どもができた時に最悪のパターンでは離婚するか、子どもを墮させられるということが結構ありますので、そういう形ではなかったということは、ひとつ救いかなと思います。

ただ、思うのは、僕がさっき言いましたが、その男性が自分の家に帰ろうとする。手紙を送ろうとする。お母さんの誕生日にプレゼントする。これは当たり前のことですね。男性は当たり前のことを当たり前にやっていますよね。それを、母親が受け入れられないということですね。この状況では、被差別部落の女の子の方が、例えば、お父さんお母さんに会いに行くのは100%無理ですね。それをして欲しいと思うんですか？(宇和島の質問者とのやり取りがある)ああ、彼が会ってほしいと言って連れて行こうと苦労しているわけですね。(はっきりと)これは、無理ですね。

言うたら悪いですけど、差別というのは「人間を人間として認めない」こと。これが差別なんです。僕も一緒ですけど、「会わん」と言われました。娘に、僕を結婚相手に選ばせないというところから始まっているんですね。だから、その時点では、はっきり言って、僕は人間として思われていないんですよ。

いうたら、この世で一番かわいい息子の話も聞けないのに、(身振り手振りも交えながら)あかの他人のその女の子の話は絶対聞かんけんね。これは、20回行っても、30回でも40回でも一緒です。

(ハッキリした口調で)だから、そんなことをするよりも、僕は、男性側の人に言いたいんですよ。あのね、「もっと、自分が幸せそうなのを前面に押し出せ」と言いたいんです。自分のお父さんお母さんと会う時に、自分の家に帰るのに、下を向いてつらそうに親の顔色を見るようにしながら、「お母さん、頼むから僕の話聞いてくれ」こんな話をしていたらはっきり言って負けますよ。

違うんです。帰った時に鍵が閉まっていたでもいいんです。裏の開いているところを探して、窓から侵入して、居間で寝転んでテレビを観ていたらいいいんですよ。(会場から笑い)当たり前ですよ。自分の家なんですから。帰ってくるなど言われても、帰っていったらいいいんですよ。

(会場全体に向かって)違いますか？皆さん。そうでしょう？帰ってくるなどという権利はないじゃないですか。

ただね、自分がこの人と結婚して幸せになっているということを見せに行くことです。近所の人、周りの友だちと、「お父さんお母さん、わかってくれるんか。おまえ、しんどいなあ。辛いなあ」こんな話をする必要は全くないと思っています。

なぜか。僕たちの場合に、Eがしんどい思いをしました。もう、親、兄弟、親戚周り、みんな、話を聞いてくれない。その時に支えてくれたのは、誰ですか？僕の高校時代からずっと一緒に活動を続けてきた全国の仲間です。用事もないのに、何百人もEのためにやって来てくれた。「Eちゃん、大丈夫？お父さん、お母さん、どんな感じ？しんどくない？」こんな話し合い、一切やりません。なぜか。こんなことをやれば、Eが同情されて、ドンドンドンしんどい思いをします。違うんです。

僕らの場合、何をするかというと、(笑顔で、ゆっくりとした口調で)この会場にも、仲間がいますが、居酒屋の宴会場を借り切って、ドンチャン騒ぎをするんです。僕らの友だちは、「ああ、Eちゃん。たいしたことない。あのな、今、お父さん、お母さん怒っているだろ？怒っている人はほっときな。人間、怒っている時は何を言ってもあかん。(表情をまねしながら)人間ってというのは、怒っていたら、アーッ！と、アーッ！と、パワーを使うんや。でも、これな、電池が切れてな、我に返る時があるんや。(会場内に笑い)この時に、聞いてもらえるんだったら聞いてもらったらええ…。そんな自分の子どもの話も聞かんような人と、そんな無駄なことはやめときな。あんたのやっていることは100%正しいことをやっているんやから、大船に乗っているような気持ちでいたらいいい。もし、あんたが監禁されたら、僕らがどんな手段を使っても連れ戻しに行っておあげるけん…。」みんな、こういうふうに言ってくれるんです。

今は、その本人同士が幸せになっているという姿を見てもらう。(会場全体に向けて、言葉を噛みしめるように、やさしくゆっくりと問いかけ始める)親の幸せって何ですか？皆さん。親の幸せは、子どもが医者になる…。公務員になる…。違うでしょ？僕も親になって改めて考えます。親の幸せは、子どもがめいっぱい幸せになることです。だからね、めいっぱい幸せになったらいいんですよ。親が、親戚が、反対しようが、祝福してくれる仲間をいっぱい集めて、お父さん、お母さんの家の周りの居酒屋で、わかるようにドンチャン騒ぎをしたらいいいやないですか！(ニコニコしながら)「こんなに幸せになっている」って。幸せになる時に気を遣う必要はない。

(前の高校生、中学生に向かって、力強く)皆、幸せになっていこう。皆そうやで…。前の若い子らも、幸せになる時は、めいっぱい親に自慢して幸せになるんや。

「ああ…、お父さんお母さんに…、話さないかん…。」こんな顔をしていたら、100%負けます。僕は、幸せになるということを前面に押し出すということで、その彼にエールを送りたいと思います。(ここからしばらく、Dさんとフロアの宇和島の女性との、元気な笑いの溢れるやり取りがある)

《フロア 女性》

(元気よく)彼が結婚する時に下呂温泉の一軒のホテル全体を貸し切って、何百人単位でお祝いをしました。

《パネリスト D》

本当ですか！どんなメンバーが参加してくれました？！

《フロア 女性》

ありとあらゆる。

《パネリスト D》

ドンチャン騒ぎしましたか？

《フロア 女性》

しました！！

《パネリスト D》

ああ、素晴らしい！僕ら、例えばその人がへこんだり辛い思いをしていたら、徳島からその人のために、居酒屋貸し切って宴会しに行きますよ！

《フロア 女性》

あの…、彼はへこたれないんですね。

《パネリスト D》

ああ、それでいいやないですか。

《フロア 女性》

彼は、家に帰るときがあります。

《パネリスト D》

ああ、帰れるんですか？僕はてっきり、家に入れてもらえないんだと思いました。

《フロア 女性》

…ところが、その時には、母親が出て行くんですね。

《パネリスト D》

ああ、お母さんが短い家出をするんですね。

《フロア 女性》

彼の妹も、全然関係ないんですが、5回くらい母親に結婚をつぶされました。

《パネリスト D》

母親に？でも、母親につぶされるような結婚というのは、結婚相手としては無理ですね。

《フロア 女性》

母親の気に入った人でなければだめなんです。

《パネリスト D》

それは言い訳ですね。

《フロア 女性》

父親の方が理解があって…。

《パネリスト D》

(驚いたように)お父さん、生きていますか？どうってことないですね。たいしたことない。お母さんだけでしょう？

《フロア 女性》

お母さんと妹です。それと、私の母です。

《パネリスト D》

これはあなたに頑張っていただかないけません。(会場から笑い)自分の親を変えるのは、自分の子しかおりませんから…。

《フロア 女性》

私がそれをすると、私の子どもにあたられるんですね。

《パネリスト D》

え？あたられるんですか…。では、あなたの子どもは必ず強い子どもになります。(会場内爆笑)

《フロア 女性》

もう、すでに強いです。

《パネリスト D》

そうでしょう！同和教育は必ず子どもが親を超えていきます。

《フロア 女性》

4歳ですでに…。

《パネリスト D》

4歳ですか？(壇上のメンバーに向かい驚きと感動を込めて)聞きましたか？4歳ですよ。

《フロア 女性》

子どもが、「お母さん、今日はおばあちゃん機嫌が悪そうだから、しゃべらない方がいいよ」って…。(会場内にも笑いと驚きの声がおこる)

《パネリスト D》

(笑いながら)聞きましたか？今のを…。

《フロア 女性》

「今日、こうこうしたんだけど、怒られちゃった！へへへ…。悪いことしていないけど、おばあちゃん、機嫌が悪いから、お母さん気をつけた方がいいよ。」とっています。

《パネリスト D》

子どもさんは大物になりますよ。(会場に向かって)このような同じような体験をしている仲間や同級生もこの会場に来ていますので、よかったら、また話をしてみてください。

《フロア 女性》

多分、彼はあきらめないと思います。

《パネリスト D》

あきらめたら、そこで試合終了ですからね。

《フロア 女性》

とても幸せそうにしています。

《パネリスト D》

それじゃあ、僕もお酒を1本持って行きます。

《フロア 女性》

ありがとうございました。

《パネリスト D》

時間を取りました。

《コーディネーター A》

幸せは私たちの心が決めていくんです。私が決めるんです。そんなよろこびがあふれる日常をみんなでつくっていきましょう。ぜひ、マイクを握りませんか？はい、どうぞ。

《フロア 中学生》

僕は、四国中央市(愛媛県)から来ました。僕の学校の先生のことなんですが、その先生は、男子と女子で話す時の態度が違って…。(壇上のDさんより声がかかる「ここにおられへんか？」会場より笑いが起こる。発言中の中学生はテレながら言葉をつなげる)はい。

学校の校則とかを破った時も、叱る時の態度が違うし、そういう男女差別みたいな感じのある先生なんですけど、僕の学校では、毎年人権劇という、自分を見つめ直すようなことを文化祭などでやっているんですけど、ここにいる先生と、3人(一緒にフォーラムに参加した中学生)も劇のメンバーなんですが、その…男女差別する先生は…(困ったように、言いくそうに笑いながら)人権劇の担当の先生なんです。(会場内から笑い)ここにおられる先生ではないです。(会場から笑い)

僕は、その担当になった先生が今も許せなくて…。…今年は、車椅子を使っている少女の話を劇にするんですが、体の弱っている子に対しての差別をなくしていこうとしているんですが、(話をしながら、しきりに困ったように、笑顔いっぱい言葉を探しながら)…僕は、全校のみんなや、地域から来られた人に差別

をなくしていこうということを広めていくのに、その先生が、広めて行く前に人を比べているっていうことが、なんか…、もう…、残念で…、…自分は、その先生に人権劇のメンバーから…(困ったように下を向いて言いくそうにする。会場内から次を想像し笑いが起こる)…外れて欲しいです。(会場に笑いが起こる)終わります。

来年は、高校生になるんですが、また、こういう会があったら、ここにおられる先生に頼んで来させてもらおうと思うので、(笑顔いっぱい)お願いします。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうね。この大勢の中で、マイクを握るということが、本当に子どもたちを変えていきます。全体学習という取り組みを北島中学校の子どもたちと一緒にやります。189名の仲間に、マイクを握って自分を伝えていく。それを本気で聞いてくれる仲間がいる。それにまた返す。このやり取りが、心と心の交流を生んでいきます。つながりをつくっていくんです。この場もそうです。あと、本当に時間が限られています。多くの仲間が、多くの年代の人たちが一人でも多くマイクを握っていただいて、この会をしめたいと思います。いかがでしょうか。はい。どうぞ。

《フロア 中学生》

四国中央市から来ました。僕も人権劇のメンバーに入っていて、話し合いとかをするんですが、僕は司会とかする時に前に座っていて、みんなを見回した時に、本当に伝わっているのかなと思ったりします。下を向いていたりして…。そんな人権劇でいいのかなと思って、僕はそれを変えていきたいし、それを伝える時に、学校の人たちに大きなことが言えるように、僕はこういう会でいろんなことをちゃんと知って、それを広めていきたいと思いました。

《コーディネーター A》

ありがとう。

《フロア 中学生》

私は今、中学3年生なんですけど、昨年、中学2年の時に部活の仲間ですいろいろ話し合いとかがあって、部活の学年の中の雰囲気がよくなくて、練習を続けていくことができなくて、当時1年生だった人らと、先生に頼んで時間をいただいて、みんなで集まって話し合いをしました。「今の部活の雰囲気はどうか」とか、つらい思いをしている子は正直に言って、2時間くらいみんなで円になって涙を流して語り合って、そういうふうには本音で語り合った後は、部活が一つになって、今はすごく楽しいです。

部活だけでなく、学級とか学年とかにそういうことを広げていきたいんですけど、学級外で司会をしている時に、話を聞いてくれなかったりとか、下を向いている人がいて、他の人でも、司会をしている側にしたらすごく辛いと思うので、学級をかえていきたいなと思いました。

《コーディネーター A》

ありがとうね。

《フロア 男性》

今日は、A先生初め、3人のパネラーの方、ありがとうございます。いろいろ話したいんですけど、先ほどの結婚の話についてお話しします。すごくささやかなことですが、私の子どもが3人おります。長男、次

男とも、自分で彼女を連れてきました。彼女との結婚の時、私は、兄弟親戚が多いものですから、身元調査したのかと言われ、徹底的に反発しました。「2人で好き合うて結婚したんだから、それでいいじゃないか。何でそんなことを言うんだ」と…。

今、2人とも仲良くやっています。ごく些細なことですけど、こういうことも一つずつやっていったらいいのではないかと思います。終わります。

《コーディネーター A》

ありがとうございます。

《フロア M》

鳥取から来ました。昨年初めて来まして、とっても良かったので今年も来ました。特に、私の大好きなBさんとCさんが来られまして、そしてDさんも来られまして、楽しみにしてやって来ました。

ここに来て、Sさんにお会いできて、すごくうれしかったです。昨年、託也さんの奥さんの英理ちゃんとも会いまして、うれしかったので、鳥取に帰りまして私も何かしたいと思いました。小地域懇談会で、このような若者が現在A先生を尊敬してつながり合って、すばらしい生き方をしておられるということを言いましたら、その会場で、「すばらしいなあ。そんな生き方があるか。自分も頑張らないけん」と言ってもらえて、すごい手ごたえを感じました。またこの度来たのも、そういうものを得たいと思ったからです。9月から、今年も小地域懇談会がありますので、そこで発信をしていかなければならないのでやって来ました。

来たら、託也さんが、おじいさんやおばあさんが強い偏見を持っているのでなかなかしんどいということをおっしゃられたので、手を挙げました。

おじいさんおばあさんは、いろいろな思いを持っていると思うのでなかなか変わらないと思うんですけど、私はBさんから学んだのですが、人を変えていく時には、ただ、「頼みます」とか、「私はこれが正しいと思います」とだけ言ってもなかなか変わらない。何が人を変えていくのかといたら「うれしい気持ちだよ」と言われました。

ですから、相手によるこぶことを何か伝えていくことが、人を変えていく小さなきっかけになると思います。それを私は、しんどかったけどやってみました。

私も姑がおります。しんどい思いをして生きてきているので、頑固な姑です。でも、「おばあちゃんがおるから、こうやって私やって行けます」ということを、言いたくなかったけど！言いました。(会場に笑いが起こる)言わないけんと言われて言いましたら、この度も、「明日帰ってくるだなあ。わかった。」と言って出してくれました。

本当に、相手のよろこぶ言葉をさがして、周りの人を大事にして生きていくことが大切だということを教えられて、本当にそう思いますので、頑張ってください。昨年度、おじいちゃん、おばあちゃんがこの会場に来ておられて、ステキだなあと思って鳥取でその話をしましたら、役員の方ですが「すごいなあ」と言っておられました。(拍手)

《コーディネーター A》

時間が迫っています。後数名の方の意見をいただいてこの会を閉めたいと思います。いかがでしょうか。(会場から数名の手が挙がる。それを確かめて)じゃあ、今、手を挙げていただいている方で…。前の方から順番でお願いします。

《フロア 中学生》

僕は、ここに座っていて、何を発表しようかと思っていたんですが、僕のお父さんの友だちの話をしたと思います。

これは、僕のお父さんから聞いた話なんですけど、友だちの人は同和地区の人で、昔、小さい時に、そこは山と川しかないようなところなんですけど、そこで周りの仲のいい友だちとかと追いかけてっこをしたりとかしていたんですが、その友だちは、まわりの子どもの親たちが「近寄ったらあかん」と言って、その周りの子どもたちから全然相手にされなかったそうです。しかも、自分の両親が共働きであまりいなかったのも、いつも孤独で淋しかったそうです。

やっぱり、その人も、結婚する時に自分は部落の人間だけど、相手の人は部落外の人で、その女の人のお母さんが反対して、結婚することはできたんですけど、悩んだということを知って、僕はそれのお父さんの友だちに会った時に、遊んだりしてくれていたのも、その人が昔そんな淋しいことがあったというのを聞きました。

僕は今、こうして勉強しているけど、近くに部落の人がいるということを知って、やっぱり、今の同級生でも、すぐに口から簡単に「部落」とか出る人もおるし、そういう人を何とかしなくてはという気持ちを今強く感じています。

これからは、こういうフォーラムに参加して、そういう子たちに部落のよさと差別はあかんということを感じてほしいと思います。(拍手)

《コーディネーター A》

北島中学校の1年生です。どう聞いたですか。いっぱい厳しい現実を生き抜いてきた先人がいます。仲間がいます。「今」「ここ」にある差別の現実。その現実を放置していくんか。そうじゃない。きちっと言葉を返す。おかしいことはおかしいと言う。人間とは何か。生きるとは何か。そのことをきちっと伝えていくことができる。そんな力をつけるために、そんな関係をつくるために、この場があるんだと思います。じゃあ、次の方お願いします。

《フロア F》

小豆島から来ました。4回目になります。来る度に、本気で意見をぶつけてくれる若者たちに出会えて、うれしいなと思います。私は中学校の教師をしています。教師いうてもわかっていないことはいっぱいあります。だから、きちんとかかしいことはおかしいと言って、ケンカをすればいいと思うし、それを私たち自身、ちゃんと受け止めていかないといけないし…。

私自身も、語り合いの学習をやっていますが、さっきの中学生みたいに、「先生もこういうところわかっていないよ」ということを、子どもたちはいっぱい持っているんだろうな。もう1回帰って訊いてみようと思います。

それと、もう1つ。やはり、結婚の問題とか切ない現実がたくさんあります。おじいちゃん、おばあちゃんの顔を知らない、会いに行っただけど会えなかったとか、いろんな現実があるんですけど、D君の話を聞いて、「幸せそうにしましょう」とか、「相手に言われた時に返す、きちんとした知識と技術と経験を持とう」それが1つの大きなキーワードかなと思います。

私も、職場が変わるたびにいろいろで、「人権問題の取り組みに頑張ろう！」という仲間がいたりいなかったり、温度差がいろいろあったりして、やろうと思っていることは迷ってはいないんですが、どうしてもエネルギーが上がったり下がったりするんです。

S君の話を聞いて、僕自身も本当にしんどいなと思うこともあるんですけど、そのためにいろんな人に会いに来ているのかな。この場に来ると、いろんな人に出会えて、「ああ、これでまたちょっと頑張らないか

んな」、「また、あの人に会えて、自分も頑張らないかな」という思いになりました。また、来年来させていただきます。よろしくお願いします。(拍手)

《フロア K》

すみません。地元の高校の教員をしています。(歩いて、会場の前に出ながら)先ほど、高校生から高校の先生に対する批判をいろいろ言われていまして、(会場内に笑いが起こる)こういう状況の中で話をするのは非常に苦しいんですが、(前から会場内を見ながら語り始める)あえてしゃべらせていただきたいと思います。

私は今、地元の高校で学力向上と進学のカラスを持って、勉強を中心としたことを頑張っています。高校生を受験生にするというような仕事をしています。高校生と受験生はどう違うのか。私の中では、受験を自分のこととして捉えているかどうかだと考えています。

前任の高校では、長いこと同和教育主事、人権教育主事をしておりましたが、この学校に来てから進学の仕事をしています。やり方のスタイルは、同和教育主事、人権教育主事をしていた頃と変わっていません。同和教育主事をしていた頃は、人権問題研究部というのがあって、ものすごく頑張ってくれていたんですが、それもやっぱり、自分がやっていた活動というのは、「ひとごと」だったのをいかに「わがごと」にかえていけるのかということだと思っています。

私は、前にいるA先生やパネリストの皆さんのように、同和問題のことを詳しく知っていたり、差別をなくす力というのは、私個人の力としては及びもしないくらいありません。だから自分にできることを考えました。

自分自身では差別をなくす力などつけてあげられないけれど、ひょっとしたら、いろんなところに連れて行ったりいろんな人と出会わせてあげれば、子どもたちが変わっていくのかなと思って、いろんな出会いとかしゃべることを経験させてきました。そうしたら、高校生が受験生に変わりました。

今まで全然しゃべれなかった人権研究部の子どもたちが、さっきの子どもたちみたいにドンドンしゃべるようになるんです。自分から変わって、自分から走り始めて、自分からドンドン力をつけていきました。ですから、私は力のない人間として、フロアの皆さんにお願いしたいんですけど、今の厳しい現実、失礼かもしれませんが、おそらく前におられる力のあるパネリストの方だけではきっと変わっていかないと思うんです。

大事なのは、私のような力のない人間が、自分にできることを自分なりに一生懸命考えて、自分にできることを続けていくことだと思えます。今、こうしてフロアを見渡していると、一生懸命メモを取ったり、自分にできることはないかなと考えながら、一生懸命に真剣に他人の話を聞いている人がおられます。

私のようにしゃべりを仕事にしている人間は、マイクを持つのが好きなんですが、マイクを持つのが苦手な人でも、一生懸命考えてくれている人はこのフロアにいっぱいいると思います。その人たちが、ドンドン自分たちの生活の舞台や仕事の場所で続けていくことが大事かなと思います。

私の好きな言葉に、使い古された言葉かもしれませんが、「一人の百歩より百人の一步」という言葉があります。私は、この一步を自分なりに踏み出していくことを続けていきたいなと思います。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございます。この会場におられる250名近くの皆さんに語っていただくことは無理です。でも、この場におられる皆さんが、これだけの温かい雰囲気をつくっていただいた。それが発言を生んでいきました。皆さんの思いの丈をアンケート用紙に書いていただけたらと思います。

一人ひとりの願いや思いが、川となって大きな力を生んでいきます。後、フロアから2人の発言で閉めたいと思います。どうぞ。

《フロア Y》

失礼します。先ほどの小豆島の先生が言われたことと同じ思いがあったんですが、このフォーラムに参加させていただいて考えたことを時間があまりないんですが、少し話をさせてもらいます。

人づき合って本当に難しいです。人と人の触れ合って、そんなに簡単に上手くいくものじゃなくて、日々悩むことが多いです。この人いい人だなと思っていても、何か、悪口など言うのを聞いていると、この人ってどんな人だろうとか、人を疑ったり、信頼していた心が崩れていたり、今までいろんな人と出会ってきて、本当に逃げ出したいなあとか人間関係嫌やなあと思ったことがあって、宗教にすがろうと思ったこともありました。

そんなふうの人に背中を向けていた頃に、同和問題学習、人権学習に出会って、本当に救われた思いがしました。その時に出会った人から私は力をもらって、人って捨てたものじゃないとか、「私得したな」「幸せやな」っていう気分になりました。そういうものがないと燃えていけないと思うんです。つらいなあ、苦しいなあだけでは、人間って続いていけないと思うんです。

私みたいに、すぐに斜めに構えてしまう人間は、なかなかこう、Dさんのように清々しく、力強く、にこやかに前を向いて突き進んで行けないんですよ。

でも、こういう場に自分を持ってくると、ステキな(パンレットを取り上げながら)鳥取から来られている、BさんやCさんのような温かい人たちの思いをもらえる。そういうことで、また自分の中に灯をともしてるんですね。何がそうさせるかといえば、人と人のつながりというか、人からもらうのもそうだけど、自分の中に燃やしていくものがないと続かないと思います。それを続けるものは、「私、これをやっていると得やな」とか「幸せやな」という思いが自分の中に感じられるから続いていけるんだなと思います。

先ほど、高校生が高校の先生に対する思いを言っておられました、へこたれず言っていてください。ケンカをしてもいいと思います。ボディブローのように、きつと効いていきます。

私もいろいろな人の思いが素直に受け止められませんでした。いいカッコばかり言って、本当は心の中は違うんだろうみたいな、そういう猜疑心がありましたけれども、やっぱり好きだなあと思い出したところから変わっていけると思います。

根気よく人と接していくこと、伝えていくこと。そのためには、「この人逃げているし」、「斜めに構えているし」と思うけど、どこかにつながるところがあるんじゃないか。人は捨てたものじゃないよというところを感じて行って欲しいと思います。

私が変われたのは、そういう子ども達の素直な思いから、自分の猜疑心が少しずつ消えていったという思いがあったのでここで言わせてもらいました。へこたれず伝えて行って欲しいと思います。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございました。

《フロア 中学校教員》

(マイクが届くのを、キョロキョロしながら待つ)すみません。失礼します。三重県から来ました。今日は、A先生から声をかけていただいて、初めてこのフォーラムに参加します。

私は、中学校の教師をしているんですけども、教員になって2年目か3年目の時に、「部落出身の青年と語る会」という学習会に参加させてもらったことがあったんです。その時に聞いた話が今でもずっと心に残っています。

どんな話かといいますと、参加者が40人か50人くらいだったと思うんですが、6～7人位の小グループに分かれて、その各グループに部落出身の方に1人ずつ入ってもらって、差別について話をしたり交流すると

いう学習会だったんです。その時に、話をしてくれた青年の言葉が今もずっと心に残っているんです。

私とあまり年の変わらないくらいの人だったと思うのですが、付き合っている彼女から、ある日突然に「別れよう」と言われた。本当に何の前ぶれもなしに別れようと言われた。理由がわからなかったので、俺のどこがあかんかったのかと彼女に聞いたんです。思いつく限りのことを、あれがあかんかったんか、これがあかんかったのかと聞いたと言うんです。「悪かったところは直すけど、どこがあかんかったん?」「何で急に、別れようって言うの?」と、彼はいろいろ言ったそうです。でも、あれも違う。これも違う。これも理由ではない。そうして、彼女を問いただしていきながら、最終的に「あ…」と思うところがあって、「もしかして…部落?」って聞いたら、彼女が泣きながら、静かにうなずいたという話でした。

その青年が、親から、「いつか結婚差別にあうかもわからん。その時に負けたらいかんよ。その時に立ち向かっていかないかんよ。」とずっと言われていた。でも、実際に部落ということが原因で彼女から別れようと言われた時に、立ち直れないくらいのもすごいショックを受けたという話をされました。その話を聞いて私もショックを受けました。

私も、小学校・中学校・高校とずっと授業の中で、部落問題に関する学習はしてきましたし、差別はしたらいけないと充分学んだつもりだったんです。でも、自分の中で、どこかで「ひとごと」のように捉えていた自分に気づいたんです。

でも、部落差別はあるんだと目の当たりにした時に、「ひとごと」と考えたらあかん。自分のこととして考えなくちゃいけないなど、その学習会に参加してすごく思い知らされました。その時に青年がこういうふうに語ってくれました。

人権問題に関わる先生や、学校の先生は人権の学習を一生懸命やってくれていると思っています。子ども達は、「差別はいかん。差別をしたらあかんとまでは、すごくよくわかってきている。だけど、そこから次の段階に行けていないのではないか」と言われました。

差別に立ち向かっていく力。差別をなくそうと実際に行動していく力を、子ども達に身に付けてあげて欲しい。だから、僕たちは先生に厳しい意見を言うけれども、先生たちにすごく期待をしているんだ。親であったりおじいちゃん、おばあちゃんの考えを変えていけるような、そういう子どもたちを育てて欲しいんだと語ってくれました。

それを聞いて、当時は、まだ教師になって3年目でしたから、未熟だったんですけど、やっぱり、差別はいけないというところで立ち止まってしまうのではなくて、差別に立ち向かっていける。差別をなくす行動に移していける。そういう子ども達を育てていけるような、そういう教師にならなくちゃいけないなということすごく思いました。

今、自分がそれができているかといえば、まだまだ力不足で未熟なんですけれども、今日もフォーラムに参加してわかったのは、まずは本音で語り合うこと。いろんな人と出会うことで、人とのつながりを持っていくこと。そこからスタートして行かなくちゃいけないなということを思いました。今日は参加させてもらって、いっぱい勉強させてもらいました。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

アツという間の3時間でした。最後、3人のパネラーから限られて時間ですが、思いを語っていただいて、フォーラムを閉めたいと思います。それでは、Bさんからお願いします。

《パネリスト B》

失礼します。今日は本当にありがとうございました。

私は、鳥取県の被差別部落の生まれです。昭和34年、1959年の伊勢湾台風の時に、このムラがどんな生き

方をしたのか。その点で少しお話をさせていただいて、部落の人たちがどんなに生命を大事にしてきたのかを聞いて欲しいと思います。

1959年、伊勢湾台風があった時に、私たちの祖先のやっ作った土手が決壊しました。その土手の下には、ムラの人たちのたくさん墓と、その横には、住宅がありました。その時に、そこに葬られていた骨が流されてしまいました。

その時、普通に考えた時何を一番にするかという、自分の住宅が流された時に、家の大事なものを出すとか、家のことをしたと思っていました。けれども、私たちの祖先は、自分たちはちょっと離れた所にある兄弟などの流されずにすんだ家に一緒に住まわせてもらいながら、家はそのままにして、まず一番に祖先の骨を拾いました。

私はその話を聞いた時、なんて素晴らしいんだと思いました。自分たちの寝る所がない。それでも、それはそのままにして祖先の骨を拾ったんです。すこし離れた所に家のあった人たちが、「早う来い来い。まだ何人かは寝られる」というふうに、ムラの中の人に別れ別れで助けてもらって、1ヶ月くらいかかって骨を拾ったようです。

その時のことを、私の母は、「その台風の直前に亡くなった遺体が祭ってあった。その遺体が着物のまま流されていく。それを見ていることしかできなかったあの情けなさ」と話しながら泣きました。でも、私は、母に「なんて素晴らしい。普通、自分の家の方が大事だよな」と言うと、「そんな場合でない。」と言われました。「大事にも、よう、こんなことがあったもんだ。」と話してくれました。

私は今、私の使命として、「村の人たちがどんなに人を大事して生きてきたか。そのことは私たちが伝えることだよな」とムラの人たちと相談しながら、ムラの中で4箇所を目安にしてフィールドワークをしながら、そこで、ムラの人たちがどう生きてきたかを子ども達に伝えながら、人と人の関わりなどを伝えながら、学習をしています。

私は、「ムラの祖先たちの生き方だけは忘れてはならん。すべての人が尊い生命を持っている」ということを子ども達に伝えています。

私は、すべての人が幸せに生きられる。そういった世の中になれる。それは、部落解放運動から始まっていくという思いを持っています。最初に言わせてもらいましたが、「風呂に入ったか?」「まま食ったか?」これは、本当に私たちが育ったそのままです。私は、子どもの頃、ムラのおばさん達から声をかけてもらった。この生き方を、次の世の子ども達にもずっと続けていくということを自分の中で決めています。そして、生き方の中で、どう関わって生きるのか。自分さえよければいいというのではないということを伝えたいと思って、今の仕事をさせていただいております。今日は、本当にありがとうございました。(拍手)

《パネリスト C》

失礼します。私も、今日は本当にありがとうございました。

皆さん、この、人権教育、同和教育を長年続けてきました。なかなか成果が上がらないという声がよくあります。決して成果は上がっていないのではありません。地道ですが、着実に変わっている人たちがいます。私たちの周りにも、結婚差別を、そんなこと関係ないと言って、子どもの思いを大事にする親もちらほら出てきました。それから、日常会話の中で、「この間、学習会でこんな話を聞いた。すごいなあ!」「研修会でこんな話を聞いた。」と、そんな声を出してくれる人もあります。

私たちは今、なかなか広がらないという段階の捉え方ではなくて、少数ではあってもこういうふうに変わってきた人がいるということをもっともっとクローズアップして、誇大広告的にでもいいから、「今、こんなふうにドンドン変わってきているんだ。いつまでそんな時代遅れのことを言っているんだということが、当たり前前に広がっていく学習を展開していく時期に来ているのではないかと感じます。

今日、受付で、資料として配っていただきました。「心の土を耕そう」という詩を見てください。実はこれは、私が人権教育を続けてきた中で、やっぱり、なかなか変わってくれないなと思った時に、なぜだろうと考えました。それは、やはり頭ではわかっている、心になかなか届いていないんだなということを感じます。

人が変わっていくためには、まず、心の土壌の掘り起しが大切だなと思います。いろんな思いを感じている豊かな柔らかな感性を、自分の中に耕していきながらいろんなことを学んだ時に、人は、スッと自分のこととして捉えていけるのではないのかな。そんなことを考えながら詩を作りました。京都にいる仲間に曲を作ってもらいました。

今日は曲を聴いてもらうことはできませんが、詩だけを紹介させてください。

心の土を耕そう

作詞 佐伯 孝代 (鳥取)

作曲 安田 茂樹 (京都)

水が染み込むように 光が染み込むように
心の土を耕そう

素敵なおことに出会っても
素敵なお人と出会っても
カチカチの土壌では
あなたのよさがわからない

切ないことに出会っても
悲しいことに出会っても
カチカチの土壌では
あなたのつらさがわからない

心の土を耕そう
人はこんなに温かいのだと感じたいから
心の土を耕そう
人の涙を 人の悔しさを受け止めたいから

同和教育幸せ配達人 佐伯 孝代

今日のこの場が、皆さんの心の土壌の掘り起こしになることを願いながら、この場を終わらせていただきます。ありがとうございました。

《パネリスト D》

(会場の後ろにいるEさんに手招きをしながら)おーい！E。僕が話すより、最後はEに話してもらった方がいい。(マイクを後ろにというコーディネーターの声をさえぎるように)前に出てきな。その方が早い。(Eさんが前に出てくると、里温君を抱き上げ、少し離れる)

《フロア E》

私が結婚差別にあって、親とか、兄弟とかに認めてもらって祝福されてこそ私の幸せがあると、今までずっとそう思ってきました。今回の結婚をする時にも、時間をかけて、1年2年待ってみれば変わるんじゃないかとも思ってみたんですが、全然自分の話を聞いてくれないような親を、1年2年伸ばしてみても変わることはないと思って、自分の中で納得をして、親が変わらなければ、自分が変わればいいんじゃないかと思ってきました。

そういうふうな気持ち切り替えてみれば心が楽になって、今まで、下を向いてつらい顔をして親と話していたんですけど、すごく前向きに生活ができるようになってきました。

今、全国にいる仲間とか友だちとか、本当に励ましてくれて、本当に支えてくれたんですけど、あまり優しくされると、よけい悲劇のヒロインみたいになって、つらいようなこともあったんです。

自分の選んだ人と幸せになるために結婚を決めたのだから、本当に一番辛いのは、私ではなく、彼と、彼の両親、家族の方に本当に辛い思いをさせたと思っています。(Dさんが里温君を肩車し、遊ばせる姿を見ながら笑顔になる)すごくひどいことを言われても、彼も彼の家族も私のことを支えてくれました。そんな気持ちがあったからこそ、幸せな結婚に向かって進んでこれたんだと思っています。

里温が生まれて、親に会いに行こうかどうかということも、迷ってはいたんですが、会いに行けて、親も親戚も兄弟も皆、里温のことを認めてくれて、そうじゃない人もいますので、本当に私は幸せだったと思っています。彼や、里温のことを通して、親の気持ちもすこしずつ氷が解けて、すごくやさしい気持ちになってくれているんじゃないかなと思っています。少しずつ理解してもらえればそれでいいと思っていますので、これからも、少しずつ私のできることで話もしていきたいし、2人目も生まれますので、幸せな家庭を築いていきたいと思っています。(拍手)

《コーディネーター A》

(笑顔で、しみじみとゆっくり語り始める)皆さん。この会場に集まれたよろこび。この場で出会えたよろこび。里温ちゃん笑顔に出会えたよろこび。Eちゃんの言葉に出会えたよろこび。D君の生き方に出会えたよろこび。Cさんの生きざまに出会えた誇り。Bさんの生きざまを受け止めた思い。

人権教育のよろこびは、出会いとつながりです。なかなか理解されない現実もあります。厳しい現実がここにあります。だからこそ、私たちは歩き続けていくし、本当の幸せをつかむために私たちは生きていくんだと思います。人間の幸せは、一人ひとりの心が決めます。私に生まれてよかった。私を生きてよかった。この学校で、この職場で学べたこと。働けたこと。そして、この仲間と出会えたことをよろこびとしていく。そんな一日一日を皆さん、つくっていきませんか。

昨年も8月27日でした。子どもたちにとっては、夏休みも終わりです。その中で語った思いが、大きな大きな力となって今日の語り合いにつながっていきました。人間は成長します。年に1回のフォーラムでの、この場を大事にしながら、人権教育のよろこびに出会う。人間の輝きに出会う。そんなこの場を大切にしていきたいと思います。本当に、会場いっぱいの皆さんの温かいまなざし、豊かな表情にいっぱいの力をもらって、会場からの発言が溢れました。

このフォーラムが開催できたこと。これは、私たちの誇りです。ここに集まれたよろこびを噛みしめながら、フォーラムを閉めたいと思います。3人のパネラーの皆さんに、最後に思いっきり拍手をしていただきたいと思います。(拍手)

ありがとうございました。中学生のみんな。高校生のみんな。ここにいた感動とよろこびを学校の仲間、みんなに伝えていきましょう。大事なものは日常です。その日常を大事にしていましょう。

以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。